
地下迷宮の女神

林来栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地下迷宮の女神

【Zコード】

Z8353V

【作者名】

林来栖

【あらすじ】

故国ランダスのお家騒動を回避するために、半ば強制的旅に出されたジェイスと、従者で親友女傭兵シェイラ。二人は故国とは大陸の真対になる南国ロンダヌスの、絶対神ウォームの神殿で、自称宫廷魔導師の絶世の美丈夫クレメントと出会い。それと同時に、300年前の七賢者の一人アルクスク大神官の魔法石が盗まれるところにも居合わせ、なんと犯人にされてしまう。

身の潔白を晴らすため、ジェイスはシェイラ、クレメントと共に、魔法石泥棒の追跡を始めるのだが……

1 (前書き)

この小説の舞台設定は、作者単行本「僕の魔法使い」と同じです。ただ、時代が違いまして、キャラクターも違います。「僕の魔法使い」をお読みでない方にも、設定内容は分かるようになりますので、どうぞお楽しみください。

なお、残酷シーンといつより、ハチャメチャな戦闘シーンが、後半戦に出て参りますので、苦手な方は、考慮の上、お読み下さい。

パンドール大陸では、神々の王にして絶対神と呼ばれるウォームが、臣下の神を大陸各地に遣わしそれぞれの国の祖とした月を、一年の初月と定めていた。

俗に『夏節祭』と呼ばれる祭は、初月の一日から一週間、各國の王家始祖の神の神殿が個々のしきたりにのつとつて執り行う。どの神殿の祭もそれなりに華やかではあるが、何と言つても大陸一の大國、ロンダヌスにあるウォーム神殿の祭が一番、盛大だった。

ウォームはロンダヌスの始祖の神ではない。古代カスタ王国から連なるこの国の王家は、絶対神の腹心として信頼されたトル・アルフル（高位妖精族）の王を祖とする。

妖精の王はウォームに敬意を込め、この地に彼の神の神殿を建てたと言われている。

王都ローレースの中央広場から西へ向かうと、白いガレリア石を積み上げた、莊厳なウォーム神殿に突き当たる。門前通りとなる西大通りは、夏節祭の間中通りの店の他に屋台が並び、大賑わいとなる。飾り付けのための造花や生花を売る店、菓子や酒のつまみのような食べ物の店、遠方からの珍しい品々を並べる店もある。

また、大門を潜った礼拝堂入り口前の広場には見せ物小屋が並び、小屋の前には客寄せの口上師、大道芸人が衆目を集めている。

個々の民家の窓辺や玄関に飾り付けられた南国特有の色鮮やかな花々、景気のいい呼び声などに祭氣分を刺激された人達が、路地をはしゃぎながら歩く。

昼過ぎ。

ロンダヌス中からやって来た観光客や、ウォームの信者の歓声に埋まる街路から神殿内へ一歩入ると、だがそこは別世界のように静

かだった。

新年の護符が配られる午前中には信者が大勢礼拝堂へ入るが、午後には閑散とするのが夏節祭時の神殿の風景である。

それは、どの神の神殿もあまり変わらなかつた。

それでも人影がちらほらとある広い礼拝堂の祭壇前に、一際目を引く男女二人が立つていた。

どちらもかなり大柄である。男の方は、肩幅が広く手足が長い。筋肉もがつちりついた身体付しだが、筋肉隆々の巨漢、という程ではない。

使い込まれた革の胸当てに、背には太い革ベルトで吊つた大剣を背負つているところから、どこかの国の剣士か傭兵とみられる。

年は二十代半ば頃、背の中程まで伸ばした、印象的な赤茶の髪を黒い組み紐でひとつに結んでいる。

女は、長身の連れより頭ひとつ半程低く、女性としては上背がある。

腰には小剣が一本、革ベルトに吊るされている。

女剣士である。

胸は豊かで、腰は蜜蜂のように見事にくびれているが、革の胴着の上からでも、鍛え抜かれた身体であるのが分かる。

女は、男好きする、肉感的でややきつめの美貌を上向け、肩に付くか付かないかで切つた癖の強い黒髪を軽く振つた。

「あれが『祝福』の魔法石よ。知つてるとと思うけど、三百年前古代力斯塔王国跡を冒険した七賢者の一人アンダレート・アルクスク大神官が持つていらしたものよ。魔法石は現在この大陸に七つ存在するわ。と言うのも、元々ひとつの中だったのをやはり七賢者の一人の闇の賢者と呼ばれるエレクトラ・ラ・ニルが魔法で七つに割つたのよ」

顔立ちに似合つたアルトに、男は「ふーん」と生返事をする。

彼女の、綺麗に切れ上がつた濃い茶の目が、きっと相手の顔を睨んだ。

1（後書き）

「当分連載はやらない」と言つておきながら・・・やつぱり書いてしまいました（汗）

下手の横好きなんでしょうが、小説を書くのが、作者ビリヤリ好きなようです（小説家になろうーに投稿している以上、当たり前ですが）

このお話も、以前に書いたものの書き直しです。結構長いし、直しも満載なので、アップの時間も掛かるかも知れませんが、よろしかつたらお付き合いください。

前書きにも書きましたが、この物語は「僕の魔法使い」の、時代をかなり下った、同じ世界設定の物語です。一部「僕の魔法使い」の登場人物の名前なども出て来ますが、前のお話を読まなくては分かるようになります（の、つもりです）

「ちょっと、眞面目に聞いてる？ ジェイスつ」「聞いてるつて。あー……、で、あれ何だ？ シエイラ」祭壇正面を指さし、間の抜けた声を出したジェイスに、シエイラは鼻を鳴らした。

「なあによつ！ 全く人の話を聞いてないじゃないつ！」

「いや、悪い。ちょっと他のこと考えてて」

ジェイスは、強張つた笑いを貼付けた頬を、人さし指でぽりぽりと搔く。

「つたくもうつ、剣にばっかり夢中になつて歴史の師匠の授業をろくすっぽ聞いてなかつたつて言つから、教えてあげればっ！ やつぱり興味のない話は、右から左なんだからつ！」

腰に手を当て捲し立てる相手に、長身の偉丈夫はたじたじとなりながら顔の前で手を合わせ謝る。

「わあるかつたつて。？？で、あれなんだ？」

ジェイスはもう一度祭壇の奥を指した。

通常、大陸の神殿の祭壇の作りは、神官らが上がる段を一番下として、その奥に供え物の台、神殿の主神の旗色と紋様を彫り込んだ木造の彫刻の順になる。

一番奥は、明かり取りの絵ガラスを嵌め込んだ出窓である。

しかし、ウォーム神殿の祭壇の奥には、他の神殿には無いものがあつた。

小さな透かし彫りの箱の乗つた、足の高い台座である。台座は、供物の台と紋様の彫刻との間に置かれていて、その上には小さな白い木箱がひとつ、乗つていた。

木箱の四方の面はが精緻な透かし彫りで葡萄の模様が描かれている。葡萄の葉と実の間の隙間から、淡い卵色の光が漏れていた。

祭壇上部の、天窓と左右のステンドグラスの窓から入る陽光だけ

が光源の仄暗い堂内で、木箱の中からの光は、見る者に小さな安らぎを与えてくれる。

木箱を指差したジェイスに、シェイラは思い切り顰め面を作る。

「だからつ、あれが魔法石よつ」

「あれが？ あんなに光つてるもんのか？」

「そうよ。『祝福』の石は淡き光の宝石』つて、かの有名な吟遊詩人のオーガスタが詠つてるじやない」

「そーだつけ」

ジェイスは、赤茶の頭を右に傾けた。

「けど、あんな箱の中に入つてつと、大きさは全くわからねえなあ
「確かに、親指の頭くらいの大きさつて、聞いたことがあるわ」
「そんなにちっこいのか？ 手の中に入つちまうなあそれじや。ランダスのはもうちつとでかかつたぜ」

「そのようね」シェイラは苦笑した。

ジェイスは、ランダス生まれのランダス育ち。傭兵として各地を旅したシェイラと違い、現在は任を解かれたが、騎士としてランダス王国に27年仕えていた、バリバリの武人である。

先のやり取りでも明白なように、ジェイスが、性格的にも興味がない歴史上の文物、特に他国の文物についてよく知らないのは、もうどうしようもない。

「ランダスに伝わるものは、七つに割った石の中で一番大きいそういうだから。?? ジェイスは、見たことあるんでしょ？」

「ああ？？まあな」

ジェイスは、内戦の時と戴冠式の折に見た、王の帶剣につけられている、純白に輝く魔法石を思い出した。

ランダス王家には、当時七賢者と共に旅をしたフィルバード王によって魔法石の一つが伝えられている。

石は、フィルバード王が、本国に帰つた後に作り直したという、王の大剣セプティリアの柄の元の部分に、竜を模した見事な金属細工によつて嵌め込まれていた。

魔法使いでもなければ使えない石を、何故王が持つ事になつたのかは、ランダスの史書にも記されていない。

ランダス王の大剣に話が及び、ジェイスは故国の風景に、ふと、思いを馳せた。

北国のランダスは冬が長い。寒さも厳しく、最北部では凍死者すら出る。海も河も凍り付き、陸は降り積もる雪で、森も村々も埋もれる。

そんな厳しい気候の国だが、短い春から秋の間には、あらゆる花が一遍に咲き、たちまち緑が萌え出す。

その、スピードで美しい移り变わりは、正に生命の力強さをランダスの国人に教えてくれる。

ロンダヌスのように南国の華やかさは無いが、素朴な美しい国、それがランダスだと、ジェイスは南までの旅をしてみてつくづくそう思うようになった。

束の間、故国を思い出してぼんやりしていた彼に、シェイラが淡い笑みと共に尋ねた。

「帰りたい？」

「？？いや」

ジェイスは苦笑しながら、首を振った。

「帰る気は、まだねえよ。？？まだ戻れっこないし」

「そうね……、連中、手ぐすね引いて待ってるでしょうしね」

笑みを留めながらも、シェイラは、旅の間中忘れかけていた苦い思いが、再び込み上げてくるのを感じていた。

数多いるランダスの騎士の中でも、ジェイスは、国外でさえ知らぬ者がいない程の、有名な騎士である。

二年前の内戦では目覚ましい功績を上げ、現国王から伯爵位まで賜つた。

本来なら、ジェイスは故国にあつて摂政である兄の仕事を手伝わなければならぬ立場なのだが、それが放浪の剣士となり大陸の真反対の国まで旅して来たのには、ランダスの国内事情と深く関わりがある。

あの時。

ジョイスの腹違いの兄で、宰相のカーライズ公から一刻も早く国を出ろと言われたあの時、ジョイスは文句も言わず兄の言に従つた。彼が悪いのではないのに、と、従者としてカーライズ公の館へ同道したシェイラは反発した。

悪いのは、ジョイスを旗頭にして再び内乱を起こそうと企てる連中だ。

だが、彼女の言葉を加勢に反論するでもなく、黙つて兄カーライズ公の館を後にするジョイスに、結局シェイラもそれ以上言い立ても出来ず従つた。

今でも、ジョイスが追放同然で国を出なればならなかつたのは、シェイラは従者としても、友としても納得していない。が、当のジョイスがそれでよしとしている以上、戻つてもう一度文句を言う訳にもいかない。

よく言えばお人好し、悪く言えば立ち回り方が下手なジョイスに呆れながら、それでもシェイラはこの男から離れる気にはなれない。男として好いている訳ではない。

多分、出来の悪い弟を放つておけない姉の心境なんだろうと、自分で分析していた。

「それにしても」

その『不器用な弟』が、故国から話題を魔法石に戻した。
「危なくねえのかなあ。あんな、囮いも無い台座の上にちょこんと乗せて。ロープつたつてこんなん、外そつと思えば簡単じゃんか」祭壇の前には、侵入禁止の意に赤いロープが、一本のポールの間に渡すように張られている。

しかしそれ以外、見張りの神官も兵士もいない。

「壇上に上がつたら、俺だと台の上に手が届くぜ？」

確かに、台座の足はかなり高く、下から一メートル以上はある。

が、祭壇を踏み台にすれば、背の高いジョイスなら苦も無く小箱に手が届く。

あまりな不用心さに、シヨイラも少し呆れつつ、顎に拳を当てた。

「そうね……、盗人がちょっと背のある奴なら簡単ね」

「でも、実際には無理ですよ？」

不意に背後から声がして、一人は驚いて振り向いた。

彼等の話に割り込んで来たのは、にこやかな笑顔を浮かべた若者だった。

年齢は二十歳くらいか。ジェイスより頭半分程度低いくらいなので、長身の部類である。

両肩から胸元まで細い金糸の刺繡を施した、木の葉模様の透かしの入った夏物の絹の白い長衣を、優雅に纏っている。着衣の良さと身ごなしから見て、貴族か大きな商家の子息であろう。

だが、ジョイスの目を最も引き付けたのは、彼の服装ではなく容姿だった。

肩まで伸ばした髪は若緑色、笑みに細められた瞳は銀という特殊な色彩の上に、長身の割に細身の身体の上に乗つた顔は、絶世の美女としか思えぬ美貌である。

ロンダヌスの王家の始祖は、トール・アルフルの王である。長く続く王家の例に漏れず、古代カスター王国から続くロンダヌス王家の血筋は、王族貴族のみならず、豪商や庶民にまで広がっている。

トール・アルフルには、眼前の若者のような、人間とは色彩の全く異なる者も多くいる、と聞く。また、飛び抜けて纖細な美貌も、トール・アルフルの特徴であるらしい。

らしい、というのは、トール・アルフルとその血を継ぐ人間は、このパンドール大陸では2ヶ国にしか居住していないからである。当然ながら、ランダスでトール・アルフルを見掛ける事は、一切無い。

しかし、聞くと見るでは大違ひだ。

息を呑む程の美しさが、正に目の前に存在している。

あんぐりと口を開けてしまつたジェイスと、同じく声もなく若者を見詰めているシェイラに、若者は微笑を苦笑に変えた。

「すみません、驚かせました？」

「あー……、いや」

声音は間違いなく、柔らかな男声である。にも関わらず、ジェイズは不覚にも顔が赤らんだ。

どうして自分が、男（だと思われる相手）に、ときめきを覚えるのか？

もしかして、眼前の美形は本当は女性なのか？
確かめるべく、ジェイスは若者の顔に、ずいっ、と自分の顔を近付けてみた。

若者は、驚いて逃げる風もなく、笑みのままの銀の瞳に、ジェイスを映している。

微かに、甘い花の香りが、若者の身体から香っている。
「あんた……、本当に男か？」

「ジェイスつ！」

不躾な態度と質問に、シェイラが怒鳴る。が当の若者は嫌な顔をするどころか、につこり笑顔を更に深めた。

「ええ、一応」

「『めんなさい』、不作法な人で」

「いえ。よく聞かれますもんで、今更気にもなりませんので。けど、質問される方の大半は『男です』の答えにがっかりした顔をされます」

「だよなあ。男ならそうだよな」

「もう一つ。本当に『めんなさい』、名乗りもしないで。あたしはシェイラ、こつちはジェイス。ランダスから来たの」「僕はクレメントです」

「失礼だけど、『ご身分は？』もしかして貴族の『ご子息かしら？』容姿からすれば、間違いない。トール・アルフルの特徴は、貴族に出易いらしی。

「いえ……。通りすがりの放蕩者です」

が、クレメントは、シェイラの問いに曖昧に答えた。

シェイラとの話の間中、じつとクレメントを見ていたジェイスは、

相手が笑顔のままだが目が笑っていないのに気付いた。
何か隠している。

だが、問い合わせても白状するような相手ではなさそうだと思い、
この場ではこれ以上追求しないと決める。

ジェイスの人間観察眼は、案外と的を射ている。

というのを、付き合いの長いシェイラはよく知っている。
ジェイスが黙っているのを、相手を探つているからと察知したシ
エイラは、クレメントの身上から、話を切り替えた。

「ところで、やつを言つてた、魔法石を盗むのは無理つていうのは何故なの？」

「ああ、それはですね、あの小箱には帰還の呪文が掛かっているんですよ」

「帰還の呪文？」

魔法は使えないのに、当然ながら聞き覚えのない言葉に、ジェイスは首を捻る。隣でシェイラは「ああ」と手を打った。

「大切なものに掛けておけば、盗まれたり何処かに置き忘れたりしても、その品は必ず手もとに帰つて来るつていう魔法よ。？？つと、それを知つてゐるつて事は、あなた、魔導師？」

「まあ、端くれではあります」

短く答えたクレメントに、シェイラはふうん、と、うさん臭げな顔で頷いた。

「でも、帰還の呪文は、古代語魔法でも中級で、現在の魔導師で呪文を使える人は少ないって話だけ？」

表情と、語尾が強くなるシェイラの口調に、ジェイスは、彼女もクレメントを曲者と睨んでいるらしいと分かった。

「そうですね。過去、多くの強い魔力を持つた魔導師を排出した口腔ダヌスでも、古代語魔法を使いこなせる魔導師は、もう幾人もいません。

この小箱に帰還の呪文を掛けたのは、七賢者のケイト・クリスグロフだと聞いています。ケイトの他に、アルクスク大神官が神聖魔法の選別の呪文も掛けているそうで、魔力の無い者、また神聖魔法が使えない者が蓋を開けようとしても、開けられません

「……本当に詳しいのね」

あからさまに疑いの響きを含ませたシェイラの相槌に、クレメントは、だが、しつとした表情で答えた。

「ロングダヌスの王宮図書館には、以上のような伝記の書物が、山とありますから」

「つて事は、あんた、宫廷魔導師か？」

ジェイスの質問に、クレメントは一瞬、銀の美しい瞳を見開いた。が、すぐに作り笑いに戻した。

「ええ……、そんなところです」

この美しい若者が泣く様子は、どんなにか甘く切ないだろう、といふ余計で不埒な思いが、瞬間ジェイスの頭に浮かぶ。

男色の素養は、自分には決してない、ヒジェイスは思つている。だのに。

降つて湧いた自分の妄想に狼狽えて、ジェイスは思わず、焦げ茶の瞳を天井に向ける。

「あー、と」

「なに、変な声出してるの？」

ショイラに聞き咎められた直後、正面入り口がどやどやと騒がしくなった。

両開きの白い木製の扉が大きく開かれ、三十人程の人間が堂内へと入つて来た。

地方からやつて來たウォーム信者のようだつた。老若男女混ざつてゐるが、皆揃いの白木の杖を持ち、やはり揃いの生成りの七分丈袖の上着を着ている。

先頭の、中年の地方神官が、ドーム型の礼拝堂一杯に響くどら声で、一同に指示を出した。

「はいっ、正面祭壇に参りますっ！ 列を作り順序良く進みましょうっ！」

信者達は楽しげにしゃべりながら、ずんずんと三列横隊で祭壇に進んで來た。

「はいっ、先の方、ちょっと申し訳ありませんが、我々にも礼拝させて頂けませんかっ？」

人の列と、神官のどら声に圧倒されて、ジェイス達は場所を明け

渡した。

右の壁側へ移動しながら、ジェイスは、ふと、一団の最後尾に目
が行つた。

背の高い人物だった。周囲から頭一つ半は、飛び出している。他の信者とは違い、灰緑色の綿ものの外套を着ている。外套のフードをすっぽりと被つており、全く顔が見えない。

長い外套は、その他の身体の部位も全て覆い隠している。が、背丈と肩幅から察するに男であろう。

それにしても、南国ロンダヌスの初夏に、薄綿ではない外套のフードを被っているのは、相当暑い筈だ。

礼拝堂は明かり取りの窓の他に、空調の穴が幾つかあり、空気が常に出入りしている。そのせいでもほど暑くはないが、それにも、あればやり過ぎではないか？

ジョイスが男を見ていたのに気が付いたシェイラが、そっと頭を寄せて来た。

「一番後ろの人？ 隨分背が高いわね。……でも、初夏のロンダヌスにフード付き外套なんて、怪し過ぎよね」

「そう、思うよな」

男は、背の割に身体に厚みが無さそうだった。

剣士や騎士なら、重い鎧を着込む上、剣を常に持ち歩くため、嫌でも筋肉がつく。

外套の動きから察するに、どうもそういうた鍛錬をしているようではない。

何者なのだろうか、とジョイスが眉間に寄せた時。

「？？の魔導師……」

「え？」

クレメントが深刻な声で呟いた。ただならぬ様子を感じて振り向いたジョイスは、先程の笑顔とは打って変わった真剣な美貌に、どきん、と鼓動が跳ね上がる。

「なん？」

またも起こつた妙なときめきを何とか抑え、聞き取れなかつた言葉を問おうとした声は、だが、突然の叫び声に搔き消された。

叫んだのは、団体の前列の信者達だった。

「魔法石がっ！」

「小箱が宙に……っ！」

ジェイスとシェイラ、それにクレメントは、弾かれたように祭壇を見た。

「ジェイスっ、小箱がっ！」

シェイラが驚いて指差した先で、先程台座の上にきちんと乗つていた魔法石の箱が、台を離れ、ふわり、と浮いていた。

ジェイスは祭壇へ行こうと動き掛けた。

「お待ちなさい」

クレメントが、彼の腕を掴んで止める。直後、小箱がぱんっ、と軽い音を立てて割れた。

透かし彫りが美しい箱は、見るも無惨に砕け、細かい破片となつて落下する。

再び、団体から悲鳴が上がる。

最初の騒ぎを聞き付けた、神殿の外回りを守つていた衛兵が数人、入つて来た。

「何事だっ！」

兵士長らしい男が、団体の責任者である神官に歩み寄る。

神官は震えながら、しどろもどろに答えた。

「こつ、小箱が浮いて……、割れて……」

「何だ？」

訳が分からず兵士長が聞き返した時、隣に並んだ兵士が声を張り

上げた。

「兵士長っ！ 魔法石が浮いておりますっ！」

兵士長が祭壇を見る。ジェイスも、釣られてそちらを向いた。と、台座の四、五十センチ程上に、大人の男の親指の先程の石が浮いていた。

砕けた外側と共に落ちなかつた魔法石は、先刻、箱の中から発していた淡い卵色ではなく、赤く禍々しい色の光を放つてゐる。

「なんで……？」

ジェイスとシェイラは、異口同音に言つた。

魔法石は睡然と見詰める人々の眼前で、きらりと強い光を放つと、次の瞬間、こつ然と消えた。

一泊置いて。

兵士達も含め、居合わせた人の大半が、大恐慌に陥つた。教典を読み上げる神官の声がよく響くように設計されている礼拝堂は、人々の阿鼻叫喚を増幅する。

大反響する悲鳴を聞き付け、神官達が奥殿から出て來た。

「どうしましたかつ？」

白地に、ウォーム神の象徴植物である百合を前面に刺繡した夏用の外衣を纏つた、12、3人の神官の中程にいた一人が、兵士長に尋ねた。

「あつ、神官長殿つ！　一大事ですつ、魔法石が消えましたつ！」

「なんとつ？！」

神官長が祭壇を振り返る。そこにある筈の小箱が無いのに、神官長の細長い顔が、みるみる驚愕の表情になつた。

「一体、どうしたのですかつ！」

他の神官達も一斉に祭壇に駆け寄る。

信者達を搔き分けて祭壇へ集まる神官達の様を他所に、クレメントが不意に入り口へ駆け出した。

「おい、どうしたんだ？」

後を追つたジェイスは、半分開いた扉から外を睨んだ若者が、吐き捨てるように呟くのを聞いた。

「逃げられた……」

「つて、誰に？」

ジェイスが追つて來ていたのに気が付いていなかつたらしいクレメントは、背後から尋ねられて、驚いた顔で振り向いた。

「あ、ええ……。さつきの長身の男です」

「フード被つた？」

「はい」

「なあに？　どうしたのよ？」

小走りに寄つて來たシェイラが、不審げに眉を寄せた。

「さつきのフード野郎が消えた」

「えつ？　じやもしかして？？？」

「おいつ、そこの二人、何をこそこそやつている？」「

ジョイス達に気付いた兵士長が、居丈高な態度で詰問する。

神殿警護の兵士に限らず、他国の兵士とやつ合ひのは、現在のジョイスの立場を考えれば、利口ではない。

ジョイスは、作り笑いを浮かべた。

「ああ、えーと、誰か出てつたみたいだなーと」「

「何だとつ？」

兵士長はジョイスの大柄な身体を押し退け、外を見た。礼拝堂の扉の外側には、急に警護の兵が中へ入ったのに驚いた祭の見物客達が、集まつて来ていた。

興味津々で大階段を上るつとあるやじ馬は、必死に止める兵士達に口々に文句を言つている。

そんな状況で兵士長が顔を出したので、やじ馬が一斉に中がどうなつてているのかと喚き出した。

わんわんと、まるで犬が吠えているかのような大勢の質問に驚いて、兵士長は慌てて扉を閉めた。

「……誰も出て行った様子は無い」

兵士長は、じろり、と二人を睨付ける。

「もしかして貴様ら、自分達の犯行を隠すためにでたらめを言つたな？」

これは、弁解しても、何のかの理由をつけて引つ張られるな、と判断したシェイラは、喧嘩覚悟で見当違いもいことこのりの相手に啖呵を切つた。

「馬鹿言わないでよつ。私達が盗人だつての？ だつたらこんなとこに何時までもぐずぐずいなわよつ」「

「むむむつ、その反抗的な態度つ。ますます怪しこーー！」

「何寝ぼけてんのよつ、このおつわんはつー！」

「何だとつ？」

「どうしたのです？」

神官長が、こちらへやつて來た。

「神官長殿っ、こやつらがどうやら盗人のようですっ！」

神官長は、ジェイス達三人を見ると「あっ」と短く叫んだ。

「あ、あなたは？？」

クレメントに対して神官長が何か言い掛けたその時、祭壇前の団体の中から声がした。

「その人達が犯人ですっ、神官長様っ！」

若い女の声だった。

ジェイスは素早く、声のした方へ目を走らせる。

その娘は、前方の集団の中にいた。長い黒髪と深緑色の瞳をした、愛らしい顔の娘だった。

髪は後頭部で高めに一つに結っている。垂らした総が、生成りの神官服の後襟で揺れている。

娘は必死の表情で、もう一度、今度は兵士長に向かつて言った。

「間違いありません。兵士長様、その人達が魔法石を盗んだのです。

私の言う事を聞いて下さい」

兵士長は、鬼の形相でジェイス達を睨む。

隣で、神官長は、ためらうように再びクレメントを見た。

「しかし……」

「私の言つ事を聞いて下さい、神官長様。その人達が盗人ですっ」

ジェイスは、娘の発音に妙な癖があるので気付いた。

何処かの国の訛りのようだが、やけに勘に触る発音だ。

すぐ側で、クレメントが、小さく息を飲む音がした。

何を驚いたのか尋ねようと横を向いた途端、いきなり腕を掴まれた。

「なん……？」

視線を戻すと、兵士長が腕を掴んでいた。

「貴様達が盗人だ、間違いない」

「はあっ？！」

違うと申し立てているのを、全く聞いていなかつたのか？

呆れて、ジェイスは、掴まれた腕と兵士長の顔を、交互に見る。

「あのー、俺達は本当に関係ないんだけど」

喧嘩覚悟のシェイラとは対照的に、ジェイスは、やはり穩便に済ませられるならそうしたい、と、大人しく反抗してみる。

しかし、兵士長は、まるで彼の言葉など耳に入っていないようだ。

「貴様達が、盗人だ」

ずいっ、と、掴んだジェイスの腕を引き、強引に連行しようとする。

厳めしいが、貼付いたように形相を全く変えない兵士長の態度に違和感を覚え、ジェイスは無言で掴まれた腕を振り解いた。

兵士長が、睨んではいるが空ろな目で、ジェイスを振り返る。

「だから、関係ないって」

「……の方が正しい。あなた達が犯人だ」

だが、今度は神官長までが、娘の言葉を肯定した。
娘がまた言った。

「捕まえなさい、兵士の方々。の人達が賊ですっ」

「違うって、言つてるでしょっ？！」

シェイラが吼えた。

しかし、娘の言葉に従つて兵達は一斉に剣を抜く。

「……こーいう、騒ぎの起こし方、したくなえんだけどなあ
じりじりと寄せて来る彼等に、ジェイスは仕方なく、背中の大剣
の柄を握つた。

団体からまた悲鳴が上がつた。

シェイラも腰の剣を抜き放つ。

「抵抗するなら、殺せつ！」

兵士長が叫んだ。

迎え撃つため剣を構えた一人に、クレメントが鋭く指示した。

「殺してはいけませんっ」

「分かつてるつてっ！」

他国の兵士を手に掛ければ、ジェイスの立場上、身分がばれた時
が厄介だ。それに、場所も礼拝堂という、最も血を嫌う所である。
左から斬り掛かってきた一人が振り下ろした剣をかい潜り様、ジ
エイスは抜刀した大剣の柄で兵士の鳩尾に当て身を食らわす。

揉んどり打つて倒れた兵士の背後から襲つてきた二人目は、回し
蹴りで弾き飛ばした。

ちらりと目の端に入つた相棒のシェイラも、片刃剣の峰を上手く
利用し、兵士を次々と床に転がしている。

たつた二人に手こずる部下に業を煮やした兵士長が、更なる増員
のために緊急用の呼ぶ子笛を吹いた。

笛を聞き付けた神殿警護の兵士達が、奥の詰め所から礼拝所へ、
ばたばたと駆けて来る。

その数、ざつと数えても、20人は下らない。

「ちょおっ……！ いくら何でも、この人数を俺とシェイラだけで
転がすのは、無理だぞ？」

さすがに降参、と、手を挙げかけたジェイスに、クレメントが真
剣な声で返して来た。

「ええ。もうこれ以上は。？？逃げましょう」

言つなり、クレメントは兵士達に右手の掌を向けた。

呪文の詠唱も何も無かつた。

クレメントの掌が向いた方向に、いきなり小さな竜巻きが起つた。竜巻きはたちまち、ジェイス達に迫つていった兵士達を突き倒す。驚いて動きを止めてしまつたジェイスとシェイラに、クレメントが早口で促した。

「外へ出てっ！」

クレメントは自分の魔法の効果など全く頓着せずに、素早く扉の外へ飛び出した。

ジェイス達も、それに続く。

見物人を礼拝堂内へ入れぬよう押さえていた外の兵士が、唐突に開けられた扉に驚き振り返る。

「捕まえろっ！」という兵士長の怒声に、幾人かの兵士がジェイス達を阻止しようと立ちはだかつた。

ジェイスはとつ掛かつて来た一人を拳骨で排除する。倒れる兵士を避けた群衆が割れた隙間をさらに広げ、三人は大通りへと出た。

「待てっ！」

礼拝堂から出て来た兵士が、彼等が分けた人波を辿つて追つて来る。

「しつこいですねっ」

クレメントは立ち止まると、もう一度掌を追つ手へ向かつて上げた。

今度は眩い光が、兵士達の頭上で炸裂する。

周囲に居合わせたやじ馬達も、一斉に目を覆つてその場に屈み込んだ。

その隙に、三人は大通りから脇道へと一目散に逃げ込んだ。

神殿内での騒ぎが始まると同時に外へと逃走した男は、広場の雑踏を通り抜け正面に向かつて右手の森の中へと入った。

この森は、ここにウォーム神殿を建てる以前から自生していた草木を、そのままそつくり残している。

自然神であるウォームの性格を考えて、ロンダヌス初代の大神官が森を残したためだつた。

森の裏手は緩やかな崖地。ウォーム神殿は、小高い丘の上を平に削つて建てられている。そのため、西大通りはなだらかな坂道になつていた。

太古から生きているであろう大木の陰へ身を隠すと、男は周囲に人気が無いのを確認して懐へ手を入れた。

フード付きの外套の内ポケットから取り出したのは、先程奪取した魔法石である。

盗難直前には赤い光を発した石は、今は穏やかな白い光を帶びている。

光の色を確認し、男はふつゝと笑いを漏らした。

「どうやら、大神官の手を三百年振りに離れたな」

神殿内に安置されていた時は、卵色の光を放っていた。

それがどうして赤くなり、また今度は純白の光となつたのか。

男は石を手の中で一、三度転がす。

「それにしても、思つていたより小さい。これではろくに用はならないな。……やはり一番大きなかけらを盗らねば駄目か」

呟くと、男は再び魔法石を懐へ終つた。

その時、すぐ近くで落ちた小枝を踏み締める音がした。男は素早くそちらを振り向く。

と、十歳くらいの少年が、灌木の影から彼を見ていた。

男は少年の方へ首を向けたまま、ゆっくりと被つていたフードを

外した。

現れたのは、褐色の肌に赤い瞳、銀の髪をした端正な、しかし氷のように冷たい雰囲気の面立ちだった。

美しい盗賊は、彼の美貌に見蕩れたのか、動かない少年の側へ一步三歩と近付いた。腕が届く距離まで来た男は、少年の細い頸に長い指を掛けた。

「名前は？」

「……アロウ」

少年は震える声で答えた。男の赤い瞳が、冷たく微笑む。

「ではアロウ、君はここで私と出会った事を、誰かに話してはならない。話せば、即座に君の命は無い」

幼いながら、アロウは男の言葉の意味を理解したようだった。夏の暑さで薔薇色だった顔色が、みるみる蒼白になる

「……どうして？」

それでも、果敢に聞き返したアロウに、男はくくつ、と喉を鳴らす。

「いい質問だ。それは、私が魔導師だからだ。七賢者を凌ぐ程の力のある私には、側に行かなくとも君の名前だけを使って君に死の呪文を掛ける事が出来る。……嘘だと思つなら、やってみようか？」

少年は、押さえられたままの頭を弱々しく振つた。

男はもう一度微笑んだ。

「いい子だ。では行きなさい」

アロウの頸から男の指が外れる。

少年が転がるように森の出口へと走り去るのを見送つて、男は小さく呪文を唱えた。

途端、小規模のつむじ風が男の身体を包む。

渦巻く風は地面に落ちている木の葉や小枝を巻き込み中空へと巻き上げる。

高みへ持ち上げられた枝が、数秒後、不意に力無く地面に落下して来た。

森の中が再び初夏の湿った空気と静寂を取り戻した時、男の姿は無くなっていた。

10 (前書き)

「つづむ。」
話がなかなか前へ進まない……

どれくらい走り回ったか。

大通りからかなり離れた、『ぢぢや』とした裏道を進み、何度も目になるか分からぬくらいの小さな曲り角を曲がつたところで、ジェイス達三人は漸く足を止めた。

耳をそばだてて見る。先程まで聞こえていた兵士の「待てっ！」という声と軍靴の音は、もう聞こえない。

やつと兵士を巻けたらしく。

ほつと、詰めていた息を吐いて、ジェイスはクレメントを見た。白析の額にうつすら汗を搔いた『自称宫廷魔導師』は、頬に若緑色の髪を一筋貼付けて空を仰いでいる。

軽く息を切らせたクレメントは、ジェイスの視線に気付くと、婉然と微笑つた。

「随分走りましたねえ」

「ああ、ジェイスは、クレメントをまじまじと見詰めてしまつて、自分が恥ずかしくなつて、ふい、と視線を逸らした。

「こんなに走つたのつて、一昨年の戦場以来だぜ」

「一昨年の、戦？」

クレメントが、きょとんとした顔で訊いた。

「確かお二人は、ランダスから来られたつておっしゃいましたよね？あの内戦に加わつておられたのですか？」

ジェイスは、ぎくりとしてショイラを見た。

ショイラが慌てて答える。

「ええ？、ああそうつ。フィアスの内乱が終わつた直後だつたんだけど、知り合いの傭兵が、ランダスの雲行きが怪しいから、もしかしたら仕事にありつけるかもつて連絡して来て。それでランダスに行つたのよ。そしたら、丁度カーライズ公の軍で傭兵を募つてて、そこに入つたの」

クレメントは、シエイラの話を聞きながら、黙つてジェイスの顔を見詰めていた。

銀色の、綺麗な目じりと見詰められて、ジェイスは、また心臓が走り始めるのを感じる。

ふと、クレメントが彼に尋ねた。

「ジェイスさんは、随分立派な大剣をお持ちですね？」

彼の大剣は、五代前の騎士カーライズ卿が、東の隣国アストランスとの戦で功績を挙げた褒美として、当時の王ティルス・アーバインから公爵位と共に報償として下された剣である。

本来なら当主のものだが、ジェイスが内戦で手柄をたてた折り、現在のカーライズ家の当主である兄が、王から伯爵位を賜つた祝いとしてくれたのだ。

もちろん、現国王の了解も得ている。

それ程、先の内戦はランダスにとって重要な戦だった。

国王所有の剣であつた大剣は、鞘にも柄にも、纖細にして美麗な文様が施されている。

それだけではなく、刀身も、鉄の中でも一番品質の良いコルーガ西部の鋼鉄が使われているため、市井で出回つているものに比べ遙かに切れ味も鋭く錆びにくい。

この剣も鞘も、山の芸術家と言われ、貴金属や武器を作らせれば人間を遙かに凌ぐ優れたものを作り出すスマール・アルフル（背の低い高位妖精族）が作ったものである。

スマール・アルフルの造形品は数が少なく、しかも材料も高価であるので、所持しているのはどの国も王侯貴族、とりわけ王の武具や武器が一般的である。

逆に言えば、一介の傭兵が所持出来るような代物ではない。

もし、クレメントが王族や貴族の出であるなら、それくらいは常識として知っている。

そして、宫廷魔導師には王侯貴族の子弟が多いのが常であった。

このままでは、素性がバレる。

ランダスの『英雄伯爵』がお忍びでロンダヌスに来ているなどと

知れれば、様々な詮索をされ兼ねない。

「あー……、これは、俺の家にあつたもんなんだ」

嘘ではない。が、誤魔化すにしてはあまりにも下手な言い訳に、
シェイラが額に手を当てて横を向いた。

10（後書き）

はつきり言って、ジョイスはほんとに『剣バカ』です（汗）

案の定、クレメントは柳眉を僅かに上げた。

「ということは、ジェイスさんのご実家は、貴族か王族ですか？」

「あーと……」

「あっ、いいえっ」

しどろもどろの主を見兼ねて、シェイラが口を出した。

「ジェイスの家は、元は貴族だったのよ。今は落ちぶれちゃったけど。ね？ そう言ってたじゃない？」

「あ、ああ」

彼女の話に合わせて、ジェイスは頷く。

笑った顔が思いつきり引き攣つた。

「そうですか」

クレメントは、何となく納得行かないという表情で、それでも頷いた。

「ところで、お一人は恋人同士か、もしかして？」

「ああ、そんなんじゃないって」

話題が自分の身分から離れたので、ジェイスはほつとして軽く言った。

「俺とシェイラは、ただの友達だ。戦友ってやつだな。一昨年の戦いで、同じ釜の飯を食つて、生死を共にしたし」

「……そなんですか」

クレメントは、ふつ、と、眉間に開いた。

笑顔に戻った美しい魔導師に、ジェイスはまた、見蕩れてしまつた。

全く不覚である。どうやら、あり得ない心情を、ジェイスはクレメントに対し持つてしまつた、らしい。

「とつ、ところでさ、この辺りつて、全然人がいねえな？」

「己の心中を悟られまいと、話を切り替え、ジェイスは薄汚いレン

ガの建物を振仰ぐ。

昼間だというのに、どの窓も錆び付いた鉄の鎧戸が、しつかりと閉まっている。

たまに開いている窓もあるが、そこには、やけに派手なカーテンがぶら下がっていた。

「もしかして、この辺って娼館街か？」

「もしかしなくても娼館街よ」

シェイラが、眉を顰めて斜め左の角を顎で示す。

角の少し先に建物の入り口があり、その脇に金縁の古びた看板が掛けている。

『小夜鳥姫の館』

「この辺りは、ロレーヌ自治大臣から認可を受けていない娼婦を雇つていて、言わばもぐりの娼館街です。王都警備の衛兵团の方に賄賂を渡し、田にほししてもらつていいんでしょう」

「詳しいんだな」

宫廷魔導師の主な仕事は、王宮内の書庫や貴族の館の書棚に眠つてゐる古い書物の解読や保管、あとは王族貴族の子弟の教育である。「己の身分や仕事柄、じついつたいかがわしい場所に出入りする事は皆無」と言つていい。

そういう職業の人間が、何故に市井の、しかも場末の情報を知っているのか。

そもそも宫廷魔導師である彼が、どうして神殿に、祭事でもないのに毎日中一人でふらりとやって来たのか。

どう考へても、宫廷魔導師、ではないだろう。とすれば、思い当たる身分は、高位の貴族、の令息か。

ジェイスも人の事は言えないが、身の上を隠しているにしては、芝居が下手過ぎる。

その美貌に、少なからず気を惹かれているジェイスとしては、どうしても素性を知りたい気分に駆られる。が、こちらも身分を隠している以上、色々聞き出すのは得策とは言えない。

分からぬ相手と長く一緒に過ごすのは、危険だ。

特に、もし推測通りクレメントが貴族の子息なら、彼の一言でロンドヌス王家や貴族達に、ジェイスの入国が知られてしまつ。國の中枢に存在が知られれば、遠からず、故国ランダスに連絡されてしまうだろう。

それに、腹の探り合いは、はつきり言って疲れる。まして、氣を惹かれる相手とは、なおさらやりたくない。

未練はあるが、それはそれとして割り切つて、早々にクレメントから離れようと決め、ジェイスは口を開いた。

「さて、追つ手も巻いた事だし。俺らはこの辺で？？」

「おや、どちらに行かれるんです？」

クレメントは、わざとらしく首を傾げる。

「つて、別に何処でもいいだろ？ あんたには関係ない」

少し苛立つて、ジェイスは口調を荒げた。

「神殿での騒ぎがまだ続いているんなら、俺らとあんたが一緒にいるのは目立つし不味いだろ？ だからここいらでさよならしよう」「

「そうですか……。まあ、そういう考え方もあるでしょう。でも、このままでは僕もあなた達も、魔法石泥棒の嫌疑を掛けられたままですよ？ ジェイスさんはそれで宜しいんですか？」

「それは……」

大変宜しくない。

これからまだまだ旅を続けなければならない身の上として、常にロンダヌスの追つ手を気にしていなければならないのは、甚だうつとうしい。

考え込んでしまったジェイスに代わり、ショイラが口を開いた。

「じゃあ、あなたには何か方法があるっていつの？」

「簡単です」

クレメントはにっこりと笑った。

「犯人を捕まえればいいんです」

「そりや、簡単なこつた」

ジェイスは呆れた。

「あのなあ。あの神殿の状況で魔法石を盗んだ挙げ句に逃げ遂せた盗人だぞ？ そんなんどうやって探すんだよつ」

「心当たりなら、あります」

「は？」

「僕と一緒に来て頂けますか？」

クレメントがジョイスの顔を覗き込んだ。銀の瞳が謎めいた光を
帶びている。

ジョイスは一瞬、返答に詰まる。

と、クレメントの右手がくるり、と大きく輪を描いた。
その刹那。

ジョイスの足が、いきなり地を離れた。

「うつわっ！」

世界が、ぐるりと回転した。そのまま、もの凄い早さで景色が後
ろへ流れる。

と同時に強い風が全身に当たり、息も出来ない程の圧迫感が襲う。
身体は完全に回転している。気分が悪く、吐きそうだ。
あとどれくらいこんな状況が続くのか。

「ぐわああああ…」

我慢出来ずにジョイスが大声を上げた時、唐突にそれは止んだ。
どすん、という鈍い音を響かせ、彼は地面に落ちた。

「いつてーつー！」

「きやあっ！」

思い切り尻餅をついたジョイスの隣に、ショイラが落ちて來た。

「つたく、どーなつてんだよつ……」

全く理解不能な出来事に、ぼやきながら周囲を見回すと、そこは
先刻までいた娼館街とは全く違った景色が広がっていた。

12 (後書き)

クレメント、結構ハチャメチャです・・・

一面の、草原である。

茫茫々と生えた夏草は幾重にも折り重なり、遠くの木の梢さえ微かにしか見えない。

頭上で、ひばりが高くさえずつている。

夏節祭の賑わいは何処へやら、遠くに民家が数軒見えるだけで、人の姿は全く無い。

民家の手前は畠だろう。青々とした麦の穂が夏風に靡いている。

「……どこだ、ここは？」

ジェイスは、一変した風景に戸惑う。

「ここはロレーヌの郊外の、リトという村の外れです」

クレメントの声が答えた。ジェイスは声のした方を振り向く。美貌の魔導師は、己の腰丈程に屋根のてっぺんが来る、小さな白い建物の前に立っていた。

生い茂った夏草が、建物の周囲を覆っている。

何の目的で、自分達をこんなど田舎まで引っ張つて来たのか？

ジェイスは、呆れて脱力する。

もう一度草の上にへたつてしまつたジェイスに代わり、怒つたシエイラがどがどかと足音を立てて、クレメントへ近付いた。

「あんたつ、一体どういう積もりつ？！ 何だつてこんなとこに私達を？？ 何よ？ この掘建て小屋は？」

「これは、名の無い神の祠、と、この辺りでは呼ばれています」

「名の無い……？」

ジェイスは興味を引かれ、立ち上ると、一人の側へと寄つた。

祠は、ジェイスの腰の辺りに屋根が来る程、小さい。

ジェイスはしゃがむと、祠の正面の白い扉を眺めた。

扉の上には小さな三角屋根が付けられている。屋根の真下、庇になる部分には、イリヤ神殿やウォーム神殿でも見られる植物の紋様

が彫刻されている。

普通、各神殿の正面扉の庇に描かれる紋様は、その神殿の主神に関係のある植物であり、それが、その神殿がどの神のものであるかを現す。

大体が大陸に自生し、一度は目にした植物なのが、この祠の庇のそれは、ジエイスが思い出す限り、一度も見た事が無い。

不思議に思つていると、同じ事を考えたらしいシェイラが、それを口にした。

「見た事の無い植物だわ……。空想の花なのかしら？」

「いえ」と、クレメントが首を振つた。

「これは、かつてこの大陸に生息していた花です。ウォームとその配下の神が降臨する以前、この大陸にはこの花が咲いていたのでしよう」

「今は、全く無いの？」

「多分。??祠は、まだこの花がこの辺りに咲いていた頃に造られたのだと思います。実際、リトの村人に尋ねても、この祠がいつ頃からあるのか、分からぬいそうです」

「でもそんな話、あなた何処から……？」

シェイラの質問に、クレメントは肩を竦める。

「ローレースの王宮には、開かずの間が幾つもあります。その中のひとつが、ウォーム降臨以前の大路上について書かれた書物を集めた部屋でした。大半はカスタ語の古典で殆ど読めませんでしたが、ひとつ何とか読めるものがあつて、その書物の中にこの花の事が書かれてありました」

「開かずの間に納められてたつて、それ、禁書ぢやないの？　あなた勝手に開かずの間に忍び込んで、禁書を読んだの？」

「まあ、そうとも言えますね」

悪戯っぽく笑つたクレメントに、シェイラは眉を釣り上げた。

「あのねえ……」

「うおっ、この扉開かねえぞっ！」

二人の話はそっちのけで、扉の中を覗こうとしたジェイスは、びくともしない扉に驚く。

「鍵が掛かってる訳じゃねえよな？」

しげしげと祠の扉を眺めるジェイスに、クレメントが微苦笑を漏らす。

「ええ。どうしても開かないんです。僕も、解除の呪文やその他色々な呪文で何度も開けようと試みたんですけど。どうやらこの祠の神に仕えていた神官か巫女が、この神独特の呪文で封じたようです」「ああそうか、そうなると、その呪文の仕組みが分からなければ開けようがないものね」

シェイラの補足に、クレメントは頷く。

「その通りです。シェイラさんはどうやら、随分魔法の勉強をなさつたようですね？」

「昔ね。でも自分で使える呪文は、火球くらいよ」

「それでも、戦場では大変な武器でしょ？」「

「ああ、そうだった」ジェイスが頷いた。

「シェイラの魔法のお陰で、結構味方は助かつたぜ。何せ一遍に十人はふつ飛ばすからな」

「そんなことないわよっ、せいぜい五人よ」

褒められて、いささか面映いシェイラは、両腕を組んで、わざと

真面目な顔を作った。

初夏の熱い風が、さわさわと草を揺らした。

ひとしきり話に区切りがついたところで、ジェイスは一番大事な事柄に思い当たった。

「つと、で、どうして、あんたこんなとこに、俺らをふつ飛ばした

「なんだ？」

「ああ」

クレメントは、よく思い出したなという顔でジェイスを見た。

「これです」

ゆっくりとクレメントが指差したのは、ジェイスの足元だった。ジェイスは、クレメントの動作に釣られゆっくり下を見た。しかしその途端。

「おつわつ！」

「何これっ！」

ジェイスも、そしてシェイラも、白い大きな敷石の上に描かれた円の上に立っていた。

円の直径は、丁度大人の男一人が立つて余裕に入る程である。中には更に小さい円が描かれ、外円と小さい円の間に不思議な形の文字のような模様が、縁に沿つて細かく描かれている。

小さい円の内側には、頭に角の生えた、人とも動物とも付かないものが一匹、描いてあった。

「これ、魔法陣よね……？」

恐る恐るそこから足を外に移しながら、シェイラがクレメントに訊いた。

「ええ」と、クレメントが頷く。

「でも、赤い魔法陣つて、初めて見たわ」

「この線、血じやねえの？」

先にさつさと退いたジェイスは、腰を折つて、魔法陣の赤黒い線を眺める。

「そうです。これは魔法陣。しかも、血で描かれた魔法陣です」

シェイラが、顔を歪めて片手を口に当てる。

ジェイスは、気色悪さに、思わず唸る。

「うげつ、やつぱり」

「僕は、前々からこの祠がノルオール縁の神のものではないかと思つていました」

「ノルオールって、カガスに封じられた、怒りの女神の？」
クレメントは、シェイラに頷いた。

「でも、縁の神つて……。ノルオールの兄妹は確かディオール。けど女神ディオールは闇の神カルーの妻だから、祠はグルゼ島にしかないんじゃ？？」

「ディオールのものならそうです。これはノルオールの他の兄妹神の祠、と考えられます」

「他に兄妹がいたの？」

「雷神ギイウォース、炎神レギン、風神ユル、そして豪雪神ニール。しかしこの神々はウォームとの戦いに破れ、今は冥府の牢の中です。？？この祠は、それらの神々の中の誰かのものと思われます」

「そんな話……」聞いたことがない、と、シェイラは目を丸くする。「それも、ロンダヌスの王宮の書庫の禁書からの知識か？」

開かずの間へ勝手に出入りしているらしい話といい、怪しい通り越して、クレメントは多分、いや、絶対に、高位貴族の子息だろう、ジェイスは確信した。

下手をすれば、王家と、かなり近い血縁の家柄の出である。猜疑心を隠さずに訊ねたジェイスに、クレメントは、本心の見えない微笑で頷いた。

「仰る通り、です。ノルオールの兄妹神の伝説は、書庫の中でも禁書の本の内容です。ですが、ノルン・アルフルはこの祠が誰を祀っているのか、ずっと知っていたようです」

「ノルン……、アルフル？」

再び出て来た聞き慣れない名称に、ジェイスは眉を寄せた。

「『ノルオールの子』と呼ばれる、闇の妖精族です。ノルン・アルフルは、ノルオールが造り出したのです。ノルオールは、先ほどシェイラさんが仰つた通り、別名『影の女神』『怒りの女神』とも呼ばれています。ノルン・アルフルは、その発生から特殊だったために、彼等独特の魔法が幾つかあります。この魔法陣？？血の標も、そのひとつです」

「血の標……」

呆然と呟いて、シェイラは難しい表情で改めて魔法陣を見下ろす。「ノルン・アルフルの血は、それ自体が闇の魔力を持つています。その血で描かれた魔法陣は、通常の魔法陣と同じく予め同様の魔法陣を描いた場所との間に限り通路を開く事が出来ます。しかも、通常の魔法陣程複雑な魔法紋章や呪文の書き込みの必要が無い」

「へええ。そんな便利な使い方が出来るんだ」
ジェイスは単純に感心した。

「で、これを使って移動すると、やつぱりつきみたいに田の前がぐるぐるするのか？」

飛んでもなく気持ち悪かった先程のクレメントの魔法を思い出して、ジエイスは真剣に訊いた。

美貌の魔導師は、苦笑する。

「いえ、魔法陣での通路移動は、本当に一瞬です。先程お一人をこへお連れしたのは飛翔の魔法で、あれの欠点は、風の魔法の変形なので身体が安定しない事なんです。でも、先に魔法陣を描いておいたり、目印を特定して距離を測定しておかなくても移動出来る呪文としては、かなり有効なんですけどね」

うー、とジエイスは唸る。

考え込んでしまった彼は無視して、シェイラが尋ねた。

「ところでさつき、この祠がノルオールの兄妹神のものだつて、ノルン・アルフルは知つていたつていつたわよね？　でも、あなたはどうして知つたの？」

クレメントは「ああ」と頷く。

「それは、先程シェイラさんがご指摘下さつた花の紋様です。実は、ノルオールとその兄妹神は、ウォーム降臨以前にこの大陸を支配していた神々の一族なのです」

「じゃあ、ノルオールはウォームとその配下の神々より、古い神つてこと？」

「そうです」

「で、その古い神々の祠の前に魔法陣があるという事は、では魔法石を盗んだ犯人はノルン・アルフルで、これを使って何処かへ逃げたつて言つ訳？」

「恐らく」

「じゃ、これを使えば俺らもその犯人の行つた場所に行かれるんじやねえの？」横から、魔法は門外漢のジエイスが口を出す。

「それは、残念ながら出来ません」

きつぱりと、クレメントが否定した。

「何で？」

首を傾げた主で親友の大男を、シェイラは睨み上げて怒鳴った。

「もうっ、だから人の話をよく聞きなさい！ さつきクレメントは言ったでしょ、この魔法陣は、ノルン・アルフル独特の魔法なのつ。つていうことは、ノルン・アルフルじゃなけりや使えないのつ！ 私達には、たとえ魔力があつたとしてもこれで何処かへ行くつて事は、出来ないのつ！」

「はー、そうなのか」

ジェイスはやつと納得した。

3（後書き）

ジェイズ、魔法については本気でバカです・・・（汗）

4（前書き）

拙作をお気に入りにして下さる方が、3人に増えている……
ありがたいことです m(—)m

しかも、累計PVが1000を突破。ニードも500突破と、本当に嬉しい限りです。
ありがとうございます。

クレメントは一人のやり取りに笑いながら、付け加えた。

「まあ、それだけではなくて、この魔法陣自体、もう行き先を閉じてしまっているようです。ただ、閉じても多少痕跡は残りますから、それで行つた先の見当がつくかも知れません」

クレメントは、魔法陣の前に屈むと、片手を円の真上に翳した。その掌から、淡い光が放たれる。

ややあって、クレメントの魔力に反応するように、魔法陣の一部が濃い青の光を帯び始めた。

「北の方角……、色はイリヤの旗色の紺。？？ランダスですね」イリヤの旗色とは、すなわちランダス王家の旗の色である。その色が魔法陣に現れたのに、ジェイスは驚く。

「そんなことが分かるのか？」

「逆に言えば、これだけしか分かりません。ランダスに飛んだ事は分かりましたが、広い国の何処に行つたかは、ここからは読めません」

「これが、ノルン・アルフルの血の魔力、……」

シェイラは唸つた。

「もしかして、先程神殿で兵士達や神官が豹変したのも、彼等の魔法なの？」

「いえ。あれは多分神聖魔法でしょう。あの娘の発音に魔力の籠つた、聞き慣れない韻がありましたから。あんな韻は、古代語魔法にも精靈魔法にもありません」

「どこの神の魔法かは？」

「残念ながら。僕は魔導師で、神官じゃないのですから」

尤もだがつづけんどんなクレメントの言い方に、シェイラは引っ掛かつて顔を顰める。

「つーことは、神殿で兵士が急に俺らを犯人扱いしたのは、あの女の魔法で操られてたからなのか？」

やつと話が見えたジェイスに、シェイラが呆れた顔で溜め息を付
き、クレメントは思い切り吹き出した。

「あれ？ 俺、そんなに変な事言つたか？」

「いーえつ。間違つてはないけど、かなり鈍いだけ」

腕を組んで、シェイラはジェイスを横目で睨んだ。

「どちらにしても、その謎は窃盗の首謀者に聞いてみるしかないで
すね」

笑いを小悪魔的に変えて、クレメントは言つた。

悪い予感が、ジェイスの背を悪寒となつて走る。

「もしかして……、これからランダスに行くとか言つ氣か？」

「ジェイスさんは勘がいいですね」

歌うように楽しげ言つと、クレメントは先程と同様、右手をくる
り、と回した。

「ちつ、ちよつと待??」て、と言い切る前に、ジェイスは再び周
囲の景色がぐにゃりと歪むのを見た。

ランダスは北国だが、夏は雨期であり結構蒸し暑い。

更に、王都ヴィードは内陸の上に大河リーリスからも距離があり、
河の涼風も届かない。

初代の王であり神であるイリヤから僅か十代で王都をここからフ
ィルバディアに移したというのも、もしかしたら十一代のハーベル
ト王が内陸性気候の蒸し暑さに耐えられなくなつたからかも知れな
い。

しかし、二百年前のアストラーンとの戦いで、フィルバディアの
王城と街の大半は焼失したため、再びヴィードが王都となつた。

皆城らしい武骨な造りのヴィード城のアーチ型の正門に、生温い
夏の風が吹き付ける。

4（後書き）

ジェイイスとショイラ、またクレメントに飛ばされちゃいましたー

行き先は、故郷ランダス。

・・・不味いってつ、それは！

「あつついなあ……」

今年の冬に新兵になつた王城正面警備の兵士は、漸く着慣れた革鎧の前を少し引つ張り、片手を扇に僅かな風を入れる。

濠を隔てた街の方から、祭の音楽が聞こえて来る。

夏節祭の賑わしい雰囲気は、だが堅牢な城の中には微塵も無い。非番ならば仲間と連れ立つて街へ出向く事も出来るが、生憎彼は今日明日ともに勤務だった。

「毎年こうなのでありますか？」

暑さと、賑わいに参加出来ない無念だから、彼は力の無い北部訛りでもう一人の、先輩の警備兵に訊いた。

先輩の兵士も同じように、些かうんざりした表情で革鎧の中を煽ぎながら答える。

「ああ。夏の正門は風が吹いたり止んだりだ。お陰で鎧の中は汗だらけ、一週間で楽に5キロは瘦せるぞ。けど、他の警備より日陰があるだけましまつてもんだ」

レンガ積みの壁だけの他の門とは違い、正門は左右に物見の塔があり、その間を結ぶように通路がある。底のように前に突き出した通路のお陰で、南向きでもかなり日差しは遮られた。それでも、暑い門前に釘付けなのに変わりは無い。新米兵がはあ、と力無く返事をしたその時。

一陣の強風が彼等の顔面に吹き付けた。

兵士達は反射的に顔を片手で覆う。

風はすぐに收まり、二人は手を離した。

と、正門の真ん前、彼等の目の前に、三人の人間が現れた。

「うわつち！」

赤毛の大男は、まるで空から降つて来たかのような格好で、思い切り門前の石畳にひっくり返つた。

再び魔法で、しかも先程とは比べ物にならない程遠い場所へ運ばれてしまったジェイスは、これも先程より数倍の気持ち悪さに襲われそのまま大の字に伸びる。

その隣に下ろされたシェイラも、腰が抜けて、べつたりとその場に座り込んだ。

完全に『魔法酔い』してしまった二人に、この状況を作り出した張本人のクレメントは、困ったように笑う。

「すいませんねえ、そんなに気持ち悪かったですか？」

「気持ち??悪い??なんて、もんじゃ、ないっ」

最後までしつこく頭を支配している眩暈をなんとか追い払おうと、ジェイスは上体を起こして頭を振った。

「どうでもいいけど……、ほんとにこれつ、辛いわよつ」

やつと動悸が治まつたシェイラが、よろよろと立ち上がる。と、門の中央から怒声が響いた。

「貴様らつ、何者だつ！」

いきなり眼前に人間が出現した衝撃からやつと立ち直つた警備兵二人が、ジェイス達に槍を構えた。

「ここをランダス王城と知つての乱入かつ？」

「え、ランダス王城……？」

ジェイスは、改めて兵士達のいる門を仰ぎ見る。

「……間違いねえや、ヴィード城だ」

ランダスに行くとは言われたが、まさか王城に連れて来られるとは予想していなかつた。

「ちょっとどうするのつ。帰つて来たのを誰かに見つかつたら??慌てるシェイラに、警備兵達はますます不振感を募らせる。

「おまえ達つ、さては最近この辺りを荒し回つてゐるといつ、盗賊の仲間かつ！」

「ちーがう、違うつ」

有名な騎士、といつても、下級の兵士達までがジェイスの顔を見知つてゐる訳ではない。

それなりの格好でなければ、騎士だとは分からぬのも当然である。

5（後書き）

帰つて来ちゃつた・・・（汗）

ジョイスは手を振ると立ち上がった。立つと更に威圧感の増す大柄な男に、兵士達は臆して後ろへ下がる。

「俺らは怪しいもんじゃないって。ただその……。ちょっと訳ありで」

どうにも説明の言葉が見付からない。

大体、選りによつてどうしてヴィード城へなど着地するのか。

シェイラの言う通り、問題ありの面々につづかりこの状況を見付けられようなものなら、それこそ大事だ。

ジョイスは、恨みを込めてちらりと後ろのクレメントを睨んだ。ジョイスの事情を察しているのか、魔導師は、わざとらしいにっこり笑顔で見返して来た。

「だつて、目標にしやすいところでしょう?」

「そりゃ そりゃ そりゃ……」

「あちらだつて、人気の無い場所より人の多い所を選びますよ。紛れ易いですから」

理屈はそうだ。

しかし、だからと言つて、真つすぐ王城に来なくても良いではないか。

「まずいつ、ぜつてー、ここは不味いつ」

呴いて、回れ右をしようとした男の袖を、クレメントが捕まる。「何処に行かれるんですか?」

「つてつたつて、王城には用もないのに入れないぜ?」

「そつ、そつよ。理由が無ければ、無理だわ」

シェイラもジョイスを援護する。

「用は、ありますよ?」

しかし、クレメントは一人の抵抗をけろりと無視し、門兵のほうへ振り向いた。

「あー、すいません。僕達見学者なんですけど、見学の許可って、何処で頂いたらよろしいんでしょうか？」

「見学者あ？」

祭時期に城の見学に訪れる者など、殆どいない。まして、空からやつて来る見学者など、前代未聞だ。

門兵二人は、増え不振な顔になる。

嘘八百な理由を述べるなら、もうちょっと捻れよ、と、ジェイスが内心ぼやきつつ頭を抱えたその時。

ジェイス達の遙か後方から蹄の音が聞こえて来た。

何事かと、門前の人間全員が振り返る。

城下の道を飛ばして来たのは、黒駒に乗った若い騎士だった。騎士は門前まで全速力で馬を飛ばして来ると、急に手綱を引き締めた。ジェイス達は、慌てて門の脇に待避した。

「緊急の用件で、国王陛下にお面通りを願います！」

ブレーキを掛けられて棒立ちになる馬上から、若い騎士が大声で述べる。

年嵩の門兵が、慌てて前へ出た。

「貴殿の所属は？」

「私は、イリヤ神殿警護の騎士パッド・ローランっ！ 神殿にて緊急の事態が起きたため、急ぎ登城しましたっ！」

門前で所属と用件を述べるのは、通常は下馬して行つものである。が、急ぎの用件という騎士は、手順を踏まず、騎乗のまま口上した。

おまけに先刻、妙な連中が城にいれろと言つて來たばかりでは、門兵は名乗りだけでは簡単に信用が出来なかつた。

「緊急事態とは何事か？」

問い合わせられて、騎士は馬上から驚きの声を上げる。

「何とつ！ 一大事だと申し上げているのに、門前で留め置かれるのかつ？」

「先程不審者が城内を窺つていたつ！ 貴公もよもやその一味では

……

「心外ですっ！」

若者は叫んだ。

「私は間違いなく神殿警護の騎士ですっ！ 神殿でお預かりしている七賢者の遺品に緊急の事態が起こったので火急参つたのですっ！ 国の大事とも言える事、すぐに陛下にお取り次ぎをつ！」

「どうやら、魔法石に関係ありますね」
クレメントが、至極冷静な声で囁いた。

「もしかして、盗まれた……？」

ショイラのその言葉に、ジョイスははつとなる。
ロングダヌスとランダス。

二つの国で同じ日に賊が同種の国の宝を盗むなど、偶然ではあり得ない。

ノルン・アルフルの仕業というクレメントの説を内心半信半疑に思っていたジョイスだが、この状況では本気で信じざるを得なかつた。

本当に、ただごとではない、かもしれない。

ジョイスは、俄に胸騒ぎを覚える。

「おいつ！」

不審な三人組に加え緊急の騎馬の登城で慌てている門兵の片方を捕まえて、ジョイスは珍しく怒鳴った。

「宰相カーライズ公に伝えよっ！ 弟キリアン伯が緊急の用件があつて帰還したとっ！」

「キ……、キリアン伯っ？」

新米の門兵は、何がなんだか分からなくなつて田玉をぐるぐると動かした。

「えー、あんたが？」

「そうだつ、とつとと言いに行けッ！」

ジョイスの迫力に圧されて、新米兵は門の中へ駆け出す。

その前へ、門外の騒ぎを聞き付けた兵士が数人、こぢりへやつて來た。

「どうした？ 何かあつたか？」

「歩兵長殿つ！」

眼前に現れた上長に、新兵は慌てて姿勢を正す。

「神殿より火急の騎馬というのが参りました。それから、宰相殿に取次げという不審者が……」

「不審者?」

歩兵長は門の右脇に立つ三人の方へ足早にやつて来た。黒い革鎧を付けた、髭面のがつしりとした剣士である。その人物を見て、ジェイスは思わず笑顔になつた。

「ガトー歩兵長じゃないかつ！」

「これは……、ジェイス・キリアン伯つ？」

歩兵長の言葉に、兵士二人が驚愕の面持ちで三人を見た。ジェイスは、一昨年の戦の時シェイラと同様『同じ死線を潜り抜けた仲間』に満面の笑みを向ける。

「いやあ良かつた。名乗つたんだがこいつら信用しなくてよ

「そうですか。しかし、伯爵は確か、大伯父であられるウイッグ候の館で、『静養中』だつたのでは？」

ジェイスが国を後にする際、兄カーライズ公が、ジェイスは病のため大伯父の館で暫く静養すると、周囲に触れ回つたのだ。無論、内戦の後の火種が燻つている状況で、殆どの王城関係者がカーライズ公の触れを額面通りには解釈していない。

それでも、表向きは『病静養中』のジェイスは、曖昧に笑つた。

「ああ?? そななんだけどな、ちょい野暮用で」

「野暮用、とは?」

「あーと……」

魔法石盜難は、南の大國ロンダヌスにとつて、間違いなく国家の一大事である。

例え親しい相手でも、簡単に吹聴していい事柄ではない。

「悪い。今は歩兵長にも言えん」

適当な言い訳が考えられず、ジェイスは誤魔化すためにわざと重々しい雰囲気を作つた。

「とにかく、急ぎなんだ」

ガトー歩兵長は、暫しジョイスの顔をじっと見、そして頷いた。

「解りました。 ?? カウル」

はつ、と、前へ出たのは、先程の歩兵の若い方の兵士だった。

「すぐに、キリアン伯の『登城を中へ知らせに行け』

新米警備兵は、踵を鳴らし敬礼をすると、ぐるりと向きを変えて走り出した。

「程なく中から迎えが参りましょ。……今は夏節祭でお歴々も」
不在です。取り敢えず城内へお入り下さ」

夏節祭の時期、貴族達は新年初日の礼拝を済ませると、休暇と称して自領へ戻る者が少なくない。

さすがに、先の戦の盟友である。ジョイスにとつて顔を合わせては不味い面々がほぼ不在なのを、ガトーは把握していた。

三人はガトーに礼を言い、正面から続く石畳を進み正面入り口へと入った。

玄関広間には、夏節祭の間にも関わらず陳情に訪れた地方官や商人などが、証明書を持つて左側の窓口に長く列を作っている。

神殿から来たという騎士は、ジェイスがガトー歩兵長と話している間に城内へと駆け込んだらしい。彼等が城へ入ろうとした時には、既に姿が無かつた。

早く事情を確認したい気持ちを抑え、ジェイスはシェイラとクレメントを促して広場中央の大きな円卓に寄つた。

「思っていたより、随分と堅固な造りですね」

クレメントは、感心するように周囲を見回す。

「正面門に警備兵が二人しかいないなんて、何と不用心な城なのかなと思いましたが、まさか入り口までのアプローチの左右が兵舎だとは」

「ああ」

円卓の上にある、来訪者が訪問理由を記入するための羽ペンを、ジェイスは手持ち無沙汰に弄ぶ。

「ヴィード城は、初代の王にして神であるイリヤが、ノルン・アルフルとの戦いのために建てた砦城が元だ。伝説によれば、当時はこの辺りにも多くのノルン・アルフルが潜伏していて、しおつちゅう襲撃があつたとか。それを防ぐために、見た目より警護を重視した造りになつてゐる」

「なるほど、そのために入り口近くに兵舎があるのですね」「十代目まで使つていて、その後一旦、王都はティリア・ミラ??現在は無くなつちまつたフィルバディアに移つたんだ。けど、一百年前、またここが王都になつた」

「炎の魔女率いるアストラנס軍との戦い……。一度目の七賢者の

伝説ですね」

ジエイスは、広間の奥、正面玄関の真正面に当たる壁面に手をやつた。

そこには、一百年前の大戦が、新たな壁画として描かれている。炎上し崩れ落ちるフィルバディア城を背景に、多くの人物像が書き込まれている。暗い色合いの画面の中央、小柄な少年の姿で描かれた当時の王の横に、水色の長い髪を靡かせた、長身の魔導師の姿があつた。

ケイト・クリスグロフ。女性名だが、れつきとした男性である。まだ十代の少年であつたティルス・アーバイン王の要請でランダスに加勢した彼は、『水のケイト』と呼ばれ七賢者の中でも一番の魔力の持ち主だった。

アーバイン王が即位して間もなく、闇の島カルーへ行つたきり行方不明となつたと、ランダス史書には伝えられている。

俗に言つ『銀泥湖の悲劇』である。

ケイトとの魔法戦に破れ、フィルバディアの地下に封印された、七賢者の紅一点、炎の魔女ファーレンの亡骸を、闇の島の神官にして同じく七賢者の一人レクトラ・ラ・ニールが、こともあるうに嘆きの女神ディオール復活の儀式に利用しようと持ち去つたのだ。ニールを追つて闇の島に入つたアーバイン王とケイトは、死闘の末ニールを倒したが、その時魔法によつて銀泥湖に引き摺られそうになつた王を助けて、ケイトはファーレンの亡骸と共に湖に沈んだ、と言われている。

ただ、これはあくまで巷の物語であつて、史書には水の賢者が闇の島で死んだ、とは書かれていない。

そのケイトも、今、ジエイス的眼前にいる若緑色の髪をした若者と同じロンドヌス出身であり、同じく絶世の美男だったといつ。

だが、横向きの壁画の顔は小さく、面影を鮮明に辿る事は出来ない。

もしかしたら、ケイトはクレメントに似ていたかもしれない。

同様の変わった髪の色から勝手にそつ連想し、ジョイスはクレメントの美貌を見た。

彼の視線に気付いたクレメントが、につ、と口角を上げる。

「しかし、やはりあなたはただ者じゃあなかったんですね」

「……は？」

いきなり自分の事を言われて、ジョイスは間抜けな声を出した。

「あなたが、かの有名な『英雄伯爵』ジョイス・キリアン伯でしたか」

「やっぱり、クレメントさんはジョイスの事、何かあると思つてたのね」

シードイラが、ジョイスの横から顔を出した。

「そりゃあそудでしょう。だつて、神殿にいる時から随分目立つてましたし」

「そんなに？」シェイラは、濃い茶の目を瞬かせる。

「ええ。ロンドヌスには、こんなにはつきりした赤毛の人は少ないんです。おまけに、見るからに腕の立ちそうな、大柄な美女と偉丈夫じゃあ、どうしたって怪しいでしょ？」

怪しげって話なら、そつちのほうが十分怪しげだろうが、と、内心で言ちながら、ジェイスは言い返した。

「でも、傭兵なら俺くらいな奴、幾らでもいるだろ？が？」

ジェイスの反論にクレメントはくすり、と笑った。

「品格が違います。あなたは大柄で腕が立ちそうなだけではなくて、やはり騎士としての品があります」

「それって、褒めてんの？」

「他にどう聞こえます？」

クレメントは、傍で見ていたシェイラが思わず赤面する程の艶やかな眼差しを、ジェイスに投げた。

「……内戦で、二十人の敵を立て続けに倒した、といつのは本当ですか？」

言いながら、クレメントは細い身体を捩るようにジェイスに近付く。

男にしては華奢な白い指が腕に触ると、ジェイスは不覚にも鼓動が跳ね上がった。

「あー、それは……」

うつすら汗さえ浮かんで来る。

「ええと、魔導師さま？」

さすがにこれは場を考えて止めた方がいいと、シェイラが動いた

時。

警備兵から連絡を受けた下級の官吏が、玄関広間へやつて來た。

「カーライズ公が、伯爵にすぐにお会いになりたいそうです」

若い官吏は「こちらです」と、先に立つて歩き出した。

これ幸いとジェイスは胸を撫で下ろした。

逆に、クレメントはちょっと残念そうな面持ちでシェイラの後ろに付いた。

三人は騒がしい広間を抜け奥へと続く短い廊下を通り、大階段へと出た。

階段を二階へと上がり、右へ曲がる。その通路の奥が謁見の間だつた。

日干しレンガの斑な色がそのままの薄暗い通路には、等間隔で壁に燭台があり灯が灯されている。

燭台の真下に、祭の間だけ飾る小さなイリヤ神の旗がそれぞれ掛けられていて、そこだけが唯一城の中で夏節祭である事を告げていた。

小さな明かりが行き来する人々の面に仄明るい揺らめきを描く通路を、ジェイス達は歩を早めて官吏の先導で進む。

やがて、彼等は謁見の間の濃茶の重い扉の前へ到着した。

半年振りに扉の前へ立つたジェイスは、感無量でその大きな姿を見上げる。

??半年前、この扉を背にした時には、もしかしたら一度どこには戻つて来ないかも知れないと、密かに思つていた。

もし戻る事が出来ても、十年、いや二十年後になるやもしそれないと。

永の別れと覚悟してあの時後にした扉を、ジェイスは何と半年という、全く予想していなかつた短期間で開けた。

中に入ると、真正面に一段高くなつた場所があり、そこに玉座が置かれ王が座つていた。

半年前と変わらず、玉座の左横にジェイスの兄、摂政カーライズ公が立つていた。

ジョイスはゆっくり、玉座の前へと歩いた。

そして王の顔が見える位置で止まり膝を折る。

「ジョイス・キリアン伯、ただいま帰還致しました。ソルニエルー世陛下には、恙無くあらせられるご様子、まことに喜ばしう存じます」

9 (後書き)

おやおや～～?
クレメントの挙動が危ないです～～
その意味は、先の方で・・・

「よく、戻られました」

玉座から、甲高い子供の声が返った。

ランダス現国王ソルニエスは今年11歳。幼いが大人に負けぬ胆力と思慮の持ち主で、補佐役の兄共々、ソルニエスが最もこの国の主にふさわしいと、ジェイスは思っていた。ジェイスは「顔をお上げなさい」という国王の言葉に従い、目線を上げた。

高い背凭れを持つ、大きな肘掛け椅子の玉座にちょこんと腰掛けたソルニエスは、自分と同じ赤毛をした大男の従兄に大きな青い目を細め、愛らしい笑みを作った。

「元気そうで何よりです、伯爵。して、今日はどうしてまた急に戻られたのですか？」

説明しようとジェイスが口を開く前に、カーライズ公の厳しい声が飛んできた。

「と、いうより、何故戻つて来たのだっ！」

濃紺の長衣を纏つた公は、神経質そうな端正な面立ちを険しくして、腹違いの弟を見詰める。

前カーライズ公の先妻の子である兄ジークリードは、後妻の、先王の末の姉姫の子でランダス王家の血を引くジェイスとは違い、黒い髪をしている。

肩まで伸ばした真っ直ぐな黒髪と、父譲りの端正だが峻厳な面差しが、如何にも厳格で勤勉な彼の性格を表している。

兄は、その容貌の通り、自身はもちろん、他人に対しても手抜きやいい加減を許さない。法を厳守しこれを重んじる事を是とし、誰よりも徹底している。

それは大切であり、決して間違つてはいない。

だが、根が気楽なジェイスとしては、もう少し気を抜いても良い

のではないかと、時々ジークリードを見ていて思つ。

幼い王の補佐という難しい仕事をきつちりこなす兄は、間違いなく誇れる兄であり、弟として全幅の信頼を置いている。

が、正直言うと、ジェイスはジークリードのこの峻厳な性格が苦手であつた。

「私が、あれ程ほどぼりが冷めるまでは戻つてはならぬと言つたのに。おまえは人の話を何と聞いていたのだつ」

厳しく叱責する攝政を、だがソルニエスが柔らかく噛めた。

「公、伯爵が危険を冒して戻られたのには、それだけ重大な理由があるのでしょうか。まずは伯爵のお話を伺いましょう」

カーライズ公は、はつとしたように君主を振り返ると、「はつ、申し訳ございません」と、頭を下げ一步下がつた。

ジェイスは思わず目を見張つた。

半年見ていかつただけで、ソルニエスはもうこの兄を押さえられるようになつてゐるとは。

幼い王の才氣に、改めて感服する。

本当に、彼は将来良い王になる。

そう思つたのは、ジェイスだけではなかつた。

「ランダスの国王陛下は、お若いのに物事がよく解つていらつしやる」

彼の斜め後ろでシェイラと並び控えていたクレメントが、不意に

言った。

カーライズ公が、初めて気が付いたという表情でそちらへ目を向けた。

「ジェイス、どなただ?」

「あ、えーと……」

クレメントを、ロンダヌスの宫廷魔導師という怪しげな肩書きで紹介していいのかどうか迷つてゐると、いきなりソニー王が玉座を飛び下りた。

「陛下つ?」

カーライズ公が慌てて呼び止めるが、ソルニエスはすたすたとクレメントの方へ歩いて行く。

そして、若者の前で止まると優雅に手を差し出した。

「ようこそおいで下さいました、ロンダヌスの王太子殿下

「王太子、殿下？」

王太子、殿下・・・(汗)

一瞬、ジェイスは呆然となつた。それはカーライズ公もシェイラも同じだつたらしく、呆気に取られた顔で一人を見ている。

「陛下、それはまことに、ございますか？」

「はい。公は覚えていらっしゃいませんか？　僕の戴冠式の時、ロンドヌスから祝賀の使者がおいでになつて」

「それは、覚えておりますが……」

「晩餐会の時、使者の方とお話したんですが、その時ロンドヌスの王太子殿下のお話が出て、使者の方が国王陛下と王太子殿下の細密画をお持ちだつたんです。それを見せて頂いて、お顔を覚えていたんです」

「さような事が……」カーライズ公は、心底驚いたという表情で、口を噤んだ。

即位式の後の晩餐会は、ジェイスも覚えていた。ロンドヌスから祝賀の大天使が来ていたのも知っていたが、ソニー王とそんな会話をしていたのは全く知らなかつた。

クレメントは、幼い王の青い瞳に真正面から見詰められて、面映そうに顔を歪めた。

「よく、覚えていらっしゃいましたねえ。？？すぐに名乗らずに申し訳ありません。ランダス国王陛下にはお初にお目もじ仕ります。僕はロンドヌスの王太子、クレメント・エディン・ダルタースと申します」

クレメントは、ソルニエスの片手を取つたまま優雅に膝を折つた。

「マジかよ……」

宫廷魔導師というのも怪しいとは思つていたが、まさかロンドヌスの王太子だつたとは。

驚愕から、思わず呟いたジェイスを、クレメントは微笑んで振り返る。

「キリアン伯にも、ご迷惑掛けましたね」
確かにご迷惑さまだった。

一回も魔法で飛ばされて、尻餅はつくわ吐き気は酷いわ。
それというのも、敵の魔法にまんまとしてやられ、盗人に仕立て上げられたからだ。

が、あそこでクレメントが身分を明かしていれば、逃げ出さなく
ても済んだのではないか。

ジェイスは改めて、どつと脱力する。

「いいけどさ。でも、最初に身分を言つてりや、魔法石盗難の犯人
扱いはされなかつたんじゃねえの？」

やけも半分で言つたジェイスに、カーライズ公とシェイラが同時に怒鳴つた。

「ジェイスっ！」

「おまえはっ！ 殿下に対し何という口の利きようだっ！」

「大体さあ、あんた王太子ならどーして大人しく城ん中に居られね
えの。ひょこひょこ一人で神殿なんかに出入りして。今頃国じや殿下が消えたつて大騒ぎしてんじゃねーの？」

「こらつ！ 口を慎めつ！」

「俺は、事実を言つてるんですよ、兄上」

「言い方というものを心得よつ！」

「いえ、いいのですカーライズ公」

クレメントは、静かに首を振つた。

「伯爵が怒られるのも道理です。僕があの時さつさと王太子である
と告げていれば、お二人を巻き添えにする事もなかつたのです。そ
れに、おつしやる通り、一人でふらついたり危ない事に首を突つ込
んだりするのは、世継ぎのする事ではありません」

「そーだよ、分かつてんじゃねえか」

「ジェイスっ、もうつ！」

シェイラが彼の袖を引っ張る。

クレメントは苦笑した。

11(後書き)

放浪癖のあるお世継ぎ・・・(汗)

ロンダヌス、大丈夫なんでしょうか?
いえ、大丈夫じゃないんです。

「ですので、名乗らうかどうか、少し迷ってしまいました。その辺りが、キリアン伯とシェイラさんに、相当怪しまれた由縁です。ただ……、今頃国で心配しているかとのご指摘なら、大丈夫です。僕がふらついて一、三日姿が見えないのはいつもの事で、城の者は慣れますから」

悪戯っぽく笑うクレメントに、ジェイスは盛大に顔を顰めた。

「自慢出来る事じゃあないでしょ、王太子殿下」

「と、いう訳で、ご迷惑でなければランダス国王陛下には、僕の探索をご許可願いたいのですが」

「それは、先程伯爵のお話に出た、魔法石ですか？」
ソルニエスの質問に、クレメントは真顔で頷いた。

「はい。実は、本日昼頃、ロンダヌスのウォーム神殿から、アルクスク大神官の魔法石が、何者かの手によつて盗まれました」
クレメントは、これまでの経緯を、王とカーライズ公に説明した。
「そうだったのですか。それで、ランダスに」

「はい、賊がランダスに行つたという事は、次の狙いはランダス王の大剣かと」

「おいつ、そんな話聞いてないぞつ」

賊がランダスに逃げたから、追つて来たのではないか。

シェイラが腕を引いて注意するのを無視して、ジェイスはクレメントに詰め寄つた。

「あんた、それ知つてここへ来たのか？ 倭らを引っ張つて？」

「ええ？？すいません」

謝る王太子に、ジェイスは一度目の溜め息をついた。

「で？ 何でロンダヌスの次にランダスの石なんだ？」

「全ての魔法石を集めるためです。ロンダヌスとランダスは、魔法石の在り処が、まず分かつていますから」

「魔法石を、集める？」

カーライズ公が聞き返した。

「一体何のために？」

公に続けて思わず問いを口にしたシェイラは、従者の身で発言した事を恥じるよう口に手を当てる。

ソルニエスは、笑顔でシェイラに頷いた。

「シェイラが言う通りです。クレメント殿下は理由を存じなのですか？」

クレメントは、一瞬困惑したような表情をした。が、意を決したように話し出した。

「これは、あくまで僕の推測に過ぎませんが。賊の狙いは、力スタ最後の王ライズワースが残した、強大な呪文を完成させる事だと思います」

「それは……？」

「『怒りの女神』の復活呪文です」

ミュシャ公国の職人の仕事である、見事なぜんまい仕掛けの大時計が、午後三時の鐘を鳴らした。

それまで高窓から入つて来ていた風がぱたり、と止む。

気が付いた侍従達が、閉まっていた南の窓を全て開ける。

再び風が入り始めた室内は、だが皆が押し黙つたままの重い雰囲気だつた。

クレメントは、衝撃を受けたの表情のまま固まつたように動かない人々を一渡り見回す。

その沈黙をシェイラが破つた。

「『怒りの女神』を復活させるなんて……。そんな事が可能なんですか？ だって、カスター王は魔導師であつても、神官じゃあなかつたでしょ？」

「例え神官であつても、神を復活させる呪文など知りません」

クレメントは、きつぱりと答えた。

「けれど、ノルン・アルフルは別です。彼等は母であるノルオールの血を受け継いでいます。それが、彼等に他の神に仕える者には不可能な呪文をあみ出す力を与えています」

「えつ？ ジャあ、カスター最後の王つて、ノルン・アルフルだったのか？」

ジエイスの疑問に、クレメントは「ええ」と頷いた。

「正確には、ノルン・アルフルの血が入つた王、です。ライズワースの母君は、スピルランドからいらした姫でした」

その場に居合わせた、ジエイス以外の人間が皆、驚きに目を見開いた。

「スピルランドの王室では、もうその頃に、ノルン・アルフルとの混血が始まつていたのですか……」

カラライズ公が、唸るように言つた。

「ええ、多分。スピルランドは、カスタの時代、幾度も蛮族からの攻撃を受けています。ノルン・アルフルは魔力が強い。彼等の助け無しに、数で勝るレイトン族やシユラ族との戦に勝つのは、難しかったのでしょうか？」

戦に勝つた報償に、ファーレン神殿は、奴隸同然だつたノルン・アルフルに、密かに領地を与えたのだろう。

そしてノルン・アルフルは、自分達の身の安全の証として、一族の女をスピルランド王宮に送り込んだのだ。

その目論見は、ある意味では成功した、と言える。

元々トール・アルフル同様、出生率が恐ろしく少ないノルン・アルフルは、現在はスピルランド国内でも集落などは全く無いという。しかし、スピルランド人との混血によつて、その血は細々とだが、繋がれているのだ。

1（後書き）

第三章、入りました。

9/13に、1を改稿しました。

余計な文章を突っ込み過ぎていたので、削りました。

削つたら、びっくりするほど短くなっちゃいましたけど（汗）

「カスタ最後の王については、得心致しました。しかしそれだけでは、証拠が不十分であろうと思われますが。殿下は、なぜ賊がノルン・アルフルだと？」

カーライズ公が、峻厳な眼差しをクレメントに向ける。

クレメントは、カーライズ公の視線を、幽かな笑みで躱した。
 「キリアン伯にもご同行願った場所で、ノルン・アルフル特有の魔法で描かれた魔法陣を発見しました。その魔法陣は、ウォーム神殿の石が奪われた直後に使われた形跡がありました」
 「そこまでは分かったけどさ、その女神さま復活と魔法石は、どういう関係があるんだ？」

魔法を全く知らないジェイスは、ぞんざいだが的を得た質問を投げて来る。

クレメントは、この赤毛の剣豪の、兄とはまた違った鋭い目を、ひた、と見据えた。

「魔法石に関する伝説で誰もが知っているのは、古代カスタ王国で作られたという事と、カスタの遺跡にあったという事です。七賢者もその伝説を頼りに遺跡を冒険し石を見付けました。

しかし、持ち帰った賢者達も、石が広大な遺跡のどの辺りにあつたのか、何のためにあつたのかは語っていない。いえ、恐らく彼等は誰一人、石が何処のどんな場所にあつたか、正確に話す事は出来なかつたでしょう。

ライズワースは、古文書によるとカスタの中に呪文を発動させるための建物を造り上げたようです。その何処かにあの石は設置されていました。魔力を増幅する特性を持っているところから、恐らくあの石は建物の中でも一番呪力が集まるように作られた場所に置かれていたと思われます」

「では、あの石が無いと復活の呪文は完成しないのですか？」

ソルニエスが、大きな瞳を更に大きく見開いて、クレメントを見上げた。

幼い王の真っ直ぐな目の中に映る己の顔を見ながら、クレメントは頷いた。

「それを知っているからこそ、賊は魔法石を集めようとしているのだと思います」

「そんな話、殿下は何処でお知りになつたんですか？ やっぱりローレー・ヌ城の書庫？」

ショイラの問いに、クレメントは薄く笑つた。

「そうです。ローレー・ヌ城はカスタ時代、離宮として建てられた城でした。そのせいか、あの城の書庫にはカスタの魔道書や史書がたくさんあります。

ところで魔道書は史書や伝説の本と違い、カスタの魔法文字という特別な文字で書かれている事は、ショイラさんはご存じですよね」「ええ」

「魔法文字は、魔力を持つ者しか読めません。魔力の無い者がページを見ても、ただの白い紙です。ライズワースが記した『怒りの女神』復活の呪文は、魔法文字の上に、更にノルンア・ルフルの血を読み取るための選別の呪文が掛けられています。即ち、ライズワース王と同じ、ノルン・アルフルの血が一滴でも身体に流れていなければあれば読めないのです」

「と、いうことは、その書物をお読みになられた殿下は、ノルン・アルフルの血をお持ち

であると？？？」

カーライズ公が、片眉をさも嫌そうに上げた。

クレメントは、公のあからさまな表情を「かもしだれません」とさらりと流した。

「可能性はあります。現に読めた訳ですし。ロンダヌス王家には、カスター時代も含め一度、スピルランドから王女が妃として嫁いでいますから」

ただし、と、ロングダヌスの王太子は付け加えた。

「僕にはノルン・アルフル特有の魔法は使えません。先程も申し上げた通り、彼等の魔法の痕跡を辿る事くらいは出来ますが」

「ちょっと待てよ」

ジェイスは、今更ながら首を捻つた。

2(後書き)

すみません、2も改稿しました。

「『怒りの女神』ノルオールがノルン・アルフルを造ったのは分かつた。で、その生き残りだか血を継いだ奴が、カスタ最後の王の呪文を完成させてノルオールを復活させようとしてるのも分かった。けどよ、どうしてノルン・アルフルは、ノルオールを復活させたい訳？ 何が奴らの得になるんだ？」

彼の問いに、クレメントは少なからず拍子抜けした。

騎士であるジェイスが、魔法を知らないのはいい。が、子供でも知つてはいる『怒りの女神』ノルオールの伝説や、その恐怖を知らないとは。

拍子抜けしただけでなく、キレた人物が部屋の中にもう一人居た。
「……ジェイス、それ、本気で言つてるの？」

シェイラは、カーライズ公には聞こえないよう小さな声で唸つた。
「あのですねっ、ノルオールはノルン・アルフルの生みの親なんですの。という事は、女神が復活すれば、ノルン・アルフルの闇の魔力も強くなるんです。再びウォームの勢力、つまり我々ですね、を退け大陸を制圧出来るかも知れません。お分かりですか？ ご主人様」

シェイラが怒っている時に出る、普段絶対使わない丁寧な言葉遣いでこんこんと言われ、ジェイスは、黙つてこくこくと頷いた。
「けれどどうして、カスター王のライズワースがノルオールの復活を望んだのでしょうか？」

ソルニエスが、心配そうに言った。

「殿下は先程、ライズワース王がノルン・アルフルの血を継いでいるとおっしゃいましたけど、それに関係あるのですか？」

「ええ」

クレメントは、美しい顔に憂いを履く。

「それが一因である事は推測出来ます。しかし、彼とカスターに関する

る古文書には、彼がスピルランドの姫を母に持つており、ノルン・アルフルの血を濃く継いでいた事と、それまでのカスタ王を遙かに凌駕する強大な魔力を有していた事、それ以上の詳細は書かれていません。ただ……」

ふつと、クレメントは口を開ざした。

その先は、自分を投影した憶測に過ぎない。ライズワースが、その魔力故に、己と同じ辛さを抱えていたかどうかは、定かではないのだ。

言い掛けで止めたクレメントの横顔を、ジェイスはそつと覗いた。やや俯けていた顔を、クレメントはいつもの笑顔と共に上げる。

「いえ。まあ、ライズワースの動機は、今回の件に直接関係ありませんし。要は早いところ盗賊を見付けて石を取り戻せば大丈夫です」「そりや、そうだけどさ……」

急に話を変えた王太子に、いまいちすつきりしないものをジェイスは感じた。

「賊がライズワースの呪文を発動させるために魔法石を集めているのなら、やはり神殿の一件も無関係ではないでしょうな……」

カーライズ公は、苦いものを舐めたような表情で言つた。

「では、先程の神殿からの使者は、やはりそれに関係しているのですか？」

クレメントは公を見る。

「はい。……実は我が国には王家に伝わる石とは別に、もうひとつ魔法石がありました」

「それは……？」

ジェイスも初耳である。彼とシェイラ、クレメントの三人は、カーライズ公の次の言葉を緊張の面持ちで待つた。

「イリヤ神殿に、七賢者の一人カルクトワース・カスガの魔法石『諷』がありました。先程の使者は、その魔法石が何者かに持ち去られたとの火急の報告です」

「由々しき事ではあるのですが、神殿は独自の法と警護体制を持つ、国法の外の機関。僕は報告を受けただけで、探索はあちらに任せようと思っていたのですが……」

ソルニエスは、愛らしい顔を曇らせた。

「公、やはり様子を見て来て下さい。王太子殿下のお話からすると、これは最早ランダス一国の問題ではありません。放つておけば、大陸全土の大問題になるやも」

カーライズ公は、一瞬はつ、と目を見開き、幼い君主を見た。

「畏りました」

恭しく礼を取った宰相に鷹揚に頷くと、ソルニエスは美しい異国の王太子に改めて向き直った。

「クレメント殿下は、どうなさいますか？」

ソルニエスの配慮に、クレメントは即座に行くと申し出た。

「キリアン伯と従者のシェイラさんも、僕の護衛として連れて行ってよろしいでしょうか？」

「結構です。では、キリアン伯、シェイラ、もしかしたら、まだ国内に賊が残っているやもしれません。ロンダヌス王太子殿下の警護を急りなきようお願いします」

「はっ」

イリヤ神殿は、ランダス王宮より南へ1キロ程行った所にある。初代の王であるイリヤ神の子、二代ハーゲン王が亡くなつた時、遺言によつてヴィード城が見える南の丘陵に墓陵を造つた。墓陵の前に葬祭殿として建てられた建物が、後にイリヤ神殿となつた。

神殿は現代までに幾度か立て直されたが、神殿の北側のハーゲン王の墓所は、神官達の手によつて守られ続け、創建当時の莊厳な姿を止めている。

三時の礼拝の終わりの鐘が鳴ると、普段ならば礼拝堂や正面には人気が殆ど無くなる。夏節祭の現在でも、ロンダヌスのウォーム神殿同様、午前中は新年の参拝の信者で溢れるが、午後は普段とあまり変わらない。

だが、今日はさすがに神殿警護の兵士や騎士が数多く出ている。その兵士や騎士の間を、中との連絡のためか、イリヤの神官戦士達が忙しく動き回っている。

祭の装飾が華やかに飾られた神殿の内外を人々が右往左往する様は、余計に騒々しく見えた。

「予想してたけど、やっぱりどたばたしてんなあ」

旅装束のまま、カーライズ公とクレメントの乗つた馬車を護衛する形で騎乗したジェイスは、轡を並べるシェイラに神殿中の慌て振りを見ながら言った。

徒步の従者が先に走り、摂政の到着を門番に伝える。

門番が慌てて開けた門を馬車はゆっくりと通り、正面入り口に前の車止めで止まった。

様子を見ていた警護の騎士が数人、馬車の紋を見て初めて何者か気付いたらしく、慌てて飛んで来た。

「これはっ。お出迎えもせずに失礼致しました。すぐに騎士団長を呼んで参ります」

中の若い騎士の一人が、礼拝堂へ戻ろうとする。公は馬車の扉を開け騎士を呼び止めた。

「それには及ばぬ。こちらから出向く故、案内を頼む」

若い騎士は「かしこまりまして」と一礼した。

ジェイスは飛んで来た厩番に手綱を渡し、馬車を降りた兄とクレメントの後ろへ付いた。

ジェイスに気付いた若い騎士が、素つ頓狂な声を上げた。

「キリアン伯でいらっしゃいますか？」

「あ？ ああ、そうだけど……」

騎士は、色白の童顔を紅潮させて胸に片手の拳を当てる、武人としての最上級の礼を取つた。

「私はパッド・ロー・エンと申します。先程は火急の事でしたのでご挨拶出来ませんでした！ お目にかかる光榮です！」

旅に出る以前、王宮に向かうと、ジエイスはこういった若い騎士にしばしば声を掛けられた。

時には腕試しがしたいと、王宮内にも拘わらず、試合を申し込まれることもあり、かなり辟易していた。

さすがに一般市民にまでは顔は知られていないので、街中ではそんなに追い掛け回されたりはなかつた。ので、ジエイスとしては、王宮に居るより街へ出でているほうが、かなり楽だつた。

旅に出てからは、尚更である。

久し振りの『ファン出現』をちょっと懐かしく思いながら、ジエイスは聞き覚えのあるその名前に首を傾げた。

「パッド・ロー・エンって、どつかで聞いたなあ

「あ、そう言えば」

思い出したシェイラが手を打つ。

「そうだつ！ さつきの神殿からの使者っ！」

「はいっ、そうですつ！」

若者は、増え顔を赤くする。

「悪かったな、こっちも急ぎの用だつたんで、覚えて無くてよ」

ジエイスは、シェイラ曰く「女よりも、男が殺せる笑顔」をパッド・ロー・エンに向けた。

「いえ……、ああ、はいっ！ 大丈夫でありますっ！」

真つ赤になり、もはやかちこちの若い騎士に苦笑しながら、クレ

メントが尋ねた。

「それにしても、早馬とはいって、口上をしてからじらうへ戻るまで、随分とお早かつたですねえ？」

「あー、はい。あの後ガトーブ兵長殿がすぐに内殿の侍従の方にお知らせ下さいまして。その上国王陛下が、随分とお早く広間にお出ましになられたものですから……」

「そういうお方なのです。ソーネ陛下は」

カーライズ公はしたり顔で、クレメントに頷く。

「ところで、話はその辺にして中へ案内して貰えまいか」

穏やかだが、些か苛立つているのが分かる公の口調に、パッドは「はいっ！」と、飛び上がりそうな勢いで返事をし、ぐるりと向きを変えた。

まるで仕掛け人形のようなぎくしゃくした動作で歩き出した若者に、クレメントは吹き出し、カーライズ公は渋い顔をした。

パッドはジェイス達を礼拝堂の奥に位置する内殿の一一番東側の部屋へ案内した。

神官長の執務室である。

丁度神殿警護の騎士団長と話をしていた神官長は、やつて来た一行に驚いて席を立つた。

「カーライズ公御自らのお越しとは、先触れを頂ければお出迎えの支度を整えましたのに」

「いや。陛下の早急に事態を見分して参れとのご命令で、不躾を承知で先触れを出さずに参りました」

お許しを、とカーライズ公は神官長に頭を下げる。

「いらっしゃ、ロンダヌスの王太子、クレメント殿下であらせます」

自分のすぐ後ろに立っていたクレメントを、公は身体を横向けて神官長に紹介する。

神官長は、初老の瘦せた顔を見る見る驚きの表情に変える。

「なんと……っ。南の大國のお世継ぎが、この北国までわざわざお越しとは」

クレメントは、何も言わず軽く会釈する。

カーライズ公は、更に後ろ控えた弟を見た。

「そしてこれが愚弟です。この事はよくご存じでしょう」

「はい。キリアン伯は、ランダスではその御名を知らぬ者無き英雄でいらっしゃいますから」

カーライズ公とクレメントは、神官長が勧めた椅子にそれぞれ腰掛けた。

ジョイスとシェイラは、一人の背後に立つた。

神官長の隣に座った騎士団長が、一同を改めて見回した。

「しかし、ロンダヌスの王太子殿下にキリアン伯とは、こう申し上げてよいのか、そうそうたるお顔触れですが……」

「さて、その事です」

公は、ひとつ咳払いをした。

「本日午後、ロンダヌスでも魔法石盗難の騒ぎがあつたのです。」
公は、先程クレメントから聞いた経緯を、かいづまんで神官長と騎士団長に語つた。

静かに聞いていた神官長は、公が言葉を切ると心痛な面持ちで言った。

「……そのような事件が。では、殿下はその賊を追つてランダスへ参られましたのですか」

「ええ。ですが、相手の方が一枚上手だつたようですね」

答えて、クレメントは苦笑した。

「僕は神殿にも魔法石があるのを、知りませんでした」

「それが、私どもも不思議でならないのです。カスガの石は、賢者のたつての頼みで所在を極力外部に漏らさぬようにしておつたのです。恐らく、今度のような事を賢者は懸念なさつて、そうおつしやられたのだと推察されます。さて、それがどうして……」

「で、石のあつた場所は？」

「この部屋の、右隣の部屋です」

神官長の案内で、一同は隣室へと移つた。

普段は使用されず、鍵が掛けられているという部屋だが、今は開けられ、四、五人の騎士と神官が中と外を見張つている。

神官長は、中で調査の指揮を執つていた年配の神官に断り、ジョイス達を招き入れた。

「ここです」

先に入った騎士団長が、室内西側の壁を指差した。

そこには五十センチ四方の大きさの鉄の扉があった。扉は左側に輪の形の取っ手があり、鉄枠に取り付けられた同じ輪と太い錠前で括られ開かないようになっている。

だが、賊は錠前は壊さず、扉の中央に男の拳より少し大きい穴を空けていた。

「こりやすげえ」

ジェイスは思わず前へ出て、扉を触ろうとした。

と、足先に堅い物が当たった。

「あり？」

二十号程の大きさの、金箔張りの額縁に収まつた風景画である。

「この扉の上には、その絵が常に掛けられています。絵は、我々が連絡を受けて部屋に入つた時にはそのように？？」

「外されて下にあつたのですか？」

クレメントの質問に、騎士団長は頷いた。

「この絵の裏に隠し扉がある事は、神殿内の者しか知りません。他の場所を荒らした形跡も無く、賊は真っすぐこの部屋の、この扉だけを目指して来てあります。という事は……」

「では、騎士団長は、神殿内の誰かの仕業とお考えですか？」

「……残念ながら」

カーライズ公が小さく唸つた。

「この大穴、ユガーの戦斧でも鉄扉をこんな風には出来ないぜ？」

ジェイスは絵を足で左の方へ押して、穴を覗く。

「火薬で爆破したのか？」

に、しては、硫黄の臭いがしない。

「魔法です。破壊の術は、やはりそれなりに魔力が無いと使えない魔法です」

クレメントの言葉に、ジェイスは「ほおお」と感心する。

「しかし」

カーライズ公が鉄扉へ近付いた。

「こんな大きな穴を空けるとなれば、例え魔法と言えどかなりな音がしただろう……」

「いえ、それが……」

神官長が、言いにくそうに俯いた。

「誰も、何の音も聞いていないのです。どうにか、ここへ出入りした者もおりません。この部屋は、神官が日に一度、掃除と通気のために開ける事になつております。時間は午前十一時と午後三時です。午前中は、通常では他の者は神官学舎の方で修練をしております。私も、神学生を教えるために学舎に行つております。

午後は昼食を挟み、二時から一般の礼拝が始まります。ですので、三時に当番の者がここを開ける時には、この辺りには他に誰も居ないのが通常です。今は夏節祭で午前は皆礼拝所へ出ておりますが、当番の時間は変えておりません」

「では、魔法石が無くなつているのに気が付いたのは、三時の時に？」

「はい。当番の者が部屋に入ったところ、この様な有り様になつていたと」

「本当に、十一時から三時の間にここに誰も来なかつたのですか？」

カーライズ公が、神官長に念を押す。

神官長は深く頷いた。

「間違ひありません。十一時の時の当番の者は、確かにこの部屋に鍵を掛けて出ておりますし。それに……」

突然、神官長の声を遮るように、部屋の外で怒鳴り声がした。
「離してよつ…」

「止めるつてつー…」

争つてこる声は、開いていた扉から中へ飛び込んで来た。

「神官長さまっ！」

入つて来たのは、若い女性の神官だった。

白衣に神官服の肩に、癖の強い黒髪が掛かっている。黒目がちの大きな瞳は、いかにも勝ち気そつである。

そのすぐ後ろに、パッド・ローエンが困った顔で立っていた。パッドが二ーナミーナと呼んだその女性神官は、すかずかと神官長の前へ進んだ。

「どうして私が言つた事を、信じて下さらないのですか？」「何の……、何の事だね？」

神官長は、皺の深い顔に困惑を浮かべて彼女を見る。

「一ーナミーナは、顔を突き出すようにして言つた。

「おとぼけにならないで下さい！ 今日正午少し前に、神官長はこちらへおこになつてらっしゃいます！ 私が、お密さまをお取次ぎして、神官長はそのお密さまにお会いになりました。それから、お祭りの礼拝がまだ終わっていないので、お密さまをこの部屋でお待たせするよつにと、おっしゃられたんです！」

「一ーナミーナは、一気にそこまで捲し立てるヒ、苛立つた氣を鎮めようと大きく深呼吸した。

神官長はおどおどと、彼女の言い分に首を振つた。

「いや……、いや。それは違うと、先程も言つた筈です。私は、正午に誰も接客していないし、この部屋にも来ていない。

いいですか、一ーナミーナ、あなたの記憶は間違つています」「いいえっ！」

一ーナミーナは激しく首を振つた。

「私は間違つていませんっ！ 間違つてるのは、神官長、あなたですっ！」

「一ーナミーナっ！」

掴み掛からんばかりの勢いで詰め寄る彼女の肩を、後ろからパッドが押された。

「離してつてつ！ パツドつ！」

「お客さまの前だつて！」

「だから何なのよつ！ 私は真実を知らせたいのつー！」

「だからつて、今は……」

「いいえ。ぜひ真実をお聞かせ頂きたいですね」

二人の言い争いに、クレメントが口を挟んだ。

全く予期していない方向から声がして、パツドも一ーナミーナもきょとんとする。

クレメントは、黒髪美人の神官に、につこりと笑った。

「あなたのお話から察するに、そのお客人といつのは、突然神官長をお訪ねになつたようですね？」

「あー、はい。……ええと、その前に、あなたどなたですか？」

尤もだが、どうにもずれた感じの彼女の質問に、クレメントとジエイス、ショイラは思わず吹き出す。

カーライズ公は盛大に顔を顰め、神官長と騎士団長は額に手を当てた。

パツドが慌てて、ジエイス達を紹介する。

「いいか二ーナミーナ、こちらはロンダヌスの王太子、クレメント殿下だ。で、こちらはカーライズ公、我がランダスの摂政様だ。それとこちらが……」

「こちらは存じ上げてるわ。ジエイス・キリアン伯でしそう？ 有名な方だもの」

悪びれず、腰に手を当てて言つ彼女に、ジエイスは更に苦笑する。

「覚えてもらつて、光榮だぜ」

「ところで、ええと、ロンダヌス王太子殿下」

「クレメントで結構です」

「ああ、じゃ、クレメント様。神官長をお訪ねのお客さまですよね？ はい、確かに急にいらつしゃつたようです。でも、普段は神殿ではそういう方は珍しくありませんので」

各国の神殿には、他の国の神殿から若い神官が頻繁に留学生としてやつて来る。神殿同士の交流を深めるためと、ウォーム神とその配下の神々の歴史をよく学ぶためである。

留学生は、予め親書を先に送つて来る場合もあるが、往々にして

自国の神殿の留学許可証と、神官長の、行く先の神殿宛の推薦状を持つていきなり来る。

そのようなやり方でも偽者が殆ど皆無なのは、どちらの書状にも神聖魔法で封がされていて、それが各地の神殿によって封印の仕方が違うからである。

封を見れば何処の神殿の書状か一目で分かり、解除する呪文も神聖魔法でなければ開かない。

「今日のお客さまも、留学生のようでした。学舎の廊下でお会いになつて、神官長に親書をお見せになつてましたから。でも、神官長は一瞬首を傾げられて……。それから少しして、私にお客さまをこちらの部屋でお待たせするようにと、お命じになりました」「なるほど」

クレメントは頬に手を当て、首を傾げる。

考えている様子の王太子に、神官長は、

「ですから、二ーナミーナの言つ事は、私には身に覚えの無い事なのです」と、再度否定する。

「でも、真実ですっ」

「あなたの空想だよ、二ーナミーナ」

「そんなん……」

「いえ、空想ではないでしょ。現にこうして、扉は魔法によつて壊されています。神官長が記憶されていないのは、多分記憶を消されていいためでしょ」

ジエイスを含め、クレメント以外の人間が一様に驚いた。

「人の記憶を操作する魔法があるのでですか？」

シェイラが尋ねる。

「あります。闇の魔法の中に」

「闇の魔法……」

クレメントの肯定に、神官長が青くなる。

8 (後書き)

女性神官戦士、一一ナミーナ。
恐いもの知らずのイノシシ娘です・・・(苦笑)

「そんな、魔法が……。でも私は……」「掛けられていない、とおっしゃるのであれば、それが本當かどうか、試してみましょうか?」「試す……?」

「簡単です」

クレメントは右手の中指と人さし指を揃え、神官長の顔面に先をぴたりと向けた。

左手の同じ指一本を、揃えた指の上に重ね軽く目を閉じる。
「??解呪^(ディスペル)」

指先から白く細い光が発した。光は神官長の額に真っすぐ当たる。光に額を押された神官長は、僅かに頭を反らせる。その途端。

神官長の灰色の瞳が大きく見開かれた。

「お……、おお、そうだ……。思い出した。確かに、二ーナミーナの言う通り、正午近くにお客人がみえて、礼拝堂はまだ信者の方で一杯だったので学舎の廊下でお会いしました。……しかし、それ以降の記憶が? ?」

「その後は、私が申し上げた通りです。でも、変だと思つたんです。夏節祭のこの時期に留学生の方が来るのも珍しいのに、それも、いつもはどなたがいらしても決してお通ししない部屋でお待たせするとおっしゃるので。でも、よろしいのですか? つてお聞きしたら、神官長は大丈夫だとおっしゃって」

「恐らく、その客という人物にそうするよつて言われたのでしよう」とクレメントの指摘に、神官長は両手で顔を覆つた。
「何ということだ……。私は自ら大事な魔法石を賊の手に差し出してしまつた……」

「仕方ありません。それだけ相手の魔力が強かつたのです。それよ

り、その客とはどんな人でしたか？」

クレメントは、顔を上げた神官長とニーナミーナを交互に見た。

ニーナミーナは首を振った。

「私は顔までは見ていません。私が神官長の「」指示で学舎まで「」案内した時は、外套の帽子を深く被っていましたから。だから、声と背格好から女性だというだけしか」

「確かに、黒髪の若い巫女でした」

神官長が言つた。

「そう、ファーレン神殿の紹介状を持っていました。私はそれと許可証が本物なのを確認し、お返しして……。それから先が……」

「という事は、敵さんは神官長が書類を読んでいる最中に術を掛けたって訳だ」

ジエイスの言葉に、クレメントがにつこり笑う。

「その通りでしょう。そしてこの部屋へ案内させるようにした」

「変です、私ずっとお二人の側にいましたけど、女性に術を掛けるような素振りは全くありませんでした」ニーナミーナは、口を尖らせる。

クレメントは、柔らかな笑みのまま、女性神官を見た。

「強い魔導師なら、呪文の動作はほんの少しでいいんです。多分その人物も、術を小声で唱えて、それから神官長の身体の何処かに一瞬触つたくらいでしょう」

「額の裏に隠し扉があるといふのは、どうやって賊は知ったのですか？　それも神官長から？」

騎士団長の質問に、クレメントは首を振った。

「いえ。人の心を操る程の術者なら、この部屋に入れれば在り処はすぐ分かります。魔法石はそれ自体が魔力の塊ですから。どんなに分厚い鉄扉でも、魔法で封印していなければ魔力はそこから漏れて来ます」

「そうですか……。して、魔法石を奪った賊は、どうやって逃走したのでしょうか？」

「僕が賊がランダスに来たと分かったのは、ロレーヌ郊外の村に残っていた移動の魔法陣を調べたからです。それから考えれば、多分この近くに同じような魔法陣を、予め描いている筈です」

クレメントの言葉を受けて、騎士と神官達は早速神殿の周囲を調べるために出て行った。

ジェイスとシェイラも神殿の騎士に混じり、辺りが暗くなるまで約一時間程、特に人目につきにくい西側の林を中心に探した。

魔法陣は見付からなかつたが、ジェイスは林の南側でおかしなものを見つかった。

「これ、木切れが女物のローブを着てるぜ」

少し離れた場所を探していたシェイラは、彼の声にそちらへ寄る。

「ほんとだわ。もしかして、賊の遺留品かも」

ジェイスは木切れを、中で待っていたクレメントとカーライズ公に見せた。

「これは……。魔法人形ですね」

木切れを見た途端、クレメントは美貌を引き締めた。

「つて何だ?」さつぱり解らないジェイスは、眉を寄せた。

「そのままです。一時的にこういつた木切れや紙切れなどを任意の動物や人の姿に変え操り人形にする術です。この術は、普通一定時間が経つと魔力が消え、人形はもとの物に戻ります。

術の効力が働いている間には、遠隔である程度の魔法を使う事が出来ます」

「では、この木切れが神官長に魔法を……?」

納得行かないという顔のカーライズ公に、クレメントははつきりと頷いた。

「そうです。鉄扉を破壊の魔法で壊したのも、この魔法人形でしょう。この人形は、役目を終えると魔法石を主か、または別の人形ないし賊の仲間に渡して、元の木切れに戻つたのです」

午後一杯慌ただしく動き回った神殿の人々は、クレメントの話に一様に肩を落とす。

結局、後一步のところで賊を特定出来なかつた。

「まあ、でもどっちにしても、奴さんはとっくの昔にトンズラしてんだし。どんな手口で魔法石を盗んだかつて分かつただけでもよしとするしかねえだろ」「

ジェイスの言葉に、疲れた顔をしながらも一同は頷いた。

今日はこれで探索を打ち切ると決め、ジェイス達は一旦王宮へと戻つた。

「賊は、ロンダヌスでは血の標を使ってこちらへ移動したので、同じ方法を用いるものだと思い込んでいました」

執務室でジェイス達を待つていたソルニエスに、クレメントは深々と頭を下げた。

「迂闊でした。魔法人形という手段があつたのを、全く失念していました。申し訳ありません」

「いいえ。僕達ランダスの者だけでは、到底そこまでも分からなかつたと思います。殿下のお力で、賊の正体は掴めたのですから、こちらこそお礼を申し上げます」

幼い王の心底からの礼に、クレメントはほつゝと美貌を和ませた。「ところで、急なお越しなので大した支度は出来なかつたのですが、晩餐の席を設けました。お口に合つかは分かりませんが、我が国の料理を用意させましたので」

キリアン伯もぜひ、と言われ、ジェイスは困つた。国王主催の晩餐に、旅で汚れた武装姿のまま出席は出来ない。

かといって私邸に戻つている時間は無い。

「確かに、私の私邸でそなたの長衣をいくつか預かっている筈だ」

兄力ーライズ公は急ぎ侍従を私邸へ走らせ、屋敷の衣装部屋に残つていたジェイスの長衣を取つて来させた。

三十分後に侍従が持つて来た私服に、ジェイスは王城の貴賓室を借りて着替えた。

精緻な連續模様が織り込まれた緋色の地に金糸の縁取りをされた

上着は、ジョイスの精悍な美貌を際立たせる。

覗きにやつて来たクレメントが、大柄な偉丈夫のあでやかな姿に、うつとりと目を細めた。

「さすが、ランダスーの名家の御曹子です」

「よせつて。あんたに言われると妙に照れる」

ジョイスは思わず本音を吐露した。傍で聞いていたシェイラが吹き出す。

「な……、なんだよつ」

浅黒い顔を真っ赤にした主の本音には触れず、シェイラは顔を真面目に整え、答えた。

「いえ。王太子殿下はお目が高いと思いまして」

「やはりシェイラさんもそう思いますか？」

婉然と微笑むクレメントに、シェイラが頷く。

「何なんだよつ、二人してつ」

分からぬジョイスは焦れて膨れた。

「要するに、惚れ直した、といつ事です」

「？？なつ」

流し目で、クレメントにそらりと言われて、ジョイスの顔が更に赤くなる。

シェイラとクレメントは、酸欠の魚のようになに口をぱくつかせるジエイスに大笑いした。

揶揄つてゐるだけなのか、本気なのか？

クレメントの本心は、その拳動からは全く読み取れない。

宴の席へ向かうべく貴賓室を先に出る王太子の細い背へ、ジョイスは小さく「ちえつ」と舌打ちした。

10 (後書き)

ジェイイスにホレてるつて・・・
本気なのか、遊んでるだけなのか・・・?
クレメント、謎です。

晚餐は、急な召集の割りには豪華なものとなつた。余計な連中の居ない中で、ジョイスは親しい人々と久々にゆつくり語らう事が出来た。

無論、晚餐の主役は彼ではなく、ロンダヌスの王太子殿下である。いきなり魔法でやつて来た大陸真反対の大國の美貌の王太子に対し、事情を知らぬ者達が興味津々となるのは事は致し方無い。食事の後は無礼講という事も手伝つて、クレメントの周囲には、あつという間に人の輪が出来上がつた。

「大丈夫かなあ……」

知人との会話が途切れたジェイスは、ふと氣になつてそちらへ目をやつた。

いかつい髭の面々の間から、鮮やかな若緑の髪が見える。クレメントは国王の隣に立ち、如才ない態度で重臣達と談話していた。

それはそうだ、と、ジョイスは変な心配をした自分に苦笑する。確かにちょっと風変わりではあるが、クレメントは間違いなく一国の王太子なのだ。

基本的に国からは動けない国王に代わり、時には外交官として外國へも出向かなければならない立場なのだ。当然こういった席で卒なく立ち回る訓練は受けている。

ただ、少し心配になつたのは、一日惚れしたから、というだけではなく、クレメントがどうも人付き合いが苦手なような気がしたからだ。

笑顔を絶やさず、飄々と周囲をあしらつているが、その実、物凄く対人関係は不器用なのではないか。

今日一日という、本当に短い付き合いでの印象でしかないのだが、どうもそんな気がする。

が、ジェイスの第一印象は、いいか悪いかよく当たる。

それが、これからクレメント、いや一人の間柄に凶と出るか吉と出るかは分からぬが。

そんな些細な心配を裡に感じながら、ジェイスはクレメントから視線をもぎ離した。

やがて夜も遅くなり、人々の声が低くなり始めた頃。

幼い国王が眠そうに目を擦り始めたのに気付いたカーライズ公は、皆に宴の終わりを告げた。

ジェイスは、泊まつていよいという兄の言葉に甘え、王城から遠い自分の邸宅には帰らず近い兄の館に泊まる事にした。

退出際、挨拶したジェイスをクレメントは呼び止めた。

「明日はちょっと寄りたい所があります。早めにこちらへ来て頂けますか？」

何処へ、と問おうとした時、兄の退出の声がした。ジェイスは、

「じゃあ、早朝に」とだけ返して大広間を出た。

「何処へ行く積もりなのかな？」

カーライズ公の馬車の後ろで、ジェイスはシェイラと轡を並べた。

シェイラは晚餐の間中、他の警護の騎士や剣士と共に次の間に控えていた。帰り際のクレメントの言葉を話すと、彼女は首を傾げた。「さあ……。殿下の考えてらっしゃる事は、分からぬわ。魔法に限らず色々知識をお持ちの方で……。かなり変わつてらっしゃるし」「んだなあ。あれで王太子じゃあ、周囲も大変だらうな」

馬の歩みの揺れに合わせ、ジェイスは頷く。
シェイラは苦笑して首を振った。

「どっちかと言つと、ご本人が辛いんぢやないかしら?」

「何で?」

「だって、私達もそうだけど、周囲の理解の範疇外でしう、きっと

と
「確かに」

頭脳明晰、なのはいいが、本心を巧みに隠して行動するのは、さ

れたほうが混乱するので困る。

シェイラの言つ通り、クレメントの頭の中身は、周囲の理解を超えている。

ただ、周囲に理解されないのをクレメントが苦にしているかどうかは、判らないが。

聰いクレメントは絶対、ジョイスの気持ちを見抜いている。見抜いた上で、自身の想いはジョイスに悟られぬよう、煙幕を張つてゐるのだ。

玄関広間での、クレメントの凄艶な流し目と誘つような態度、それに自分が服を着替えた時の彼の言葉などを思い出して、ジョイスは我知らず赤面した。

「どうかした？」

急に黙つたので、訝しんだシェイラが彼の顔を覗いた。

先を照らす馬車の明かり程度では、顔色までは見えないのが幸いした。

また赤くなつているのがばれれば、シェイラは絶対揶揄つてくる。

「いや、何でも」

済ました声で返したジョイスに、シェイラは「そつ」とだけ言って姿勢を戻した。

ジェイズ、翻弄されます・・・(汗)

翌朝、ジェイスは約束通り早い時間に登城した。

午前八時。この時刻には、だがランダス国王は既に起床している。通常、国王は六時に起床し、七時に朝食、八時前には執務室へ入り、午前十時に主立った重臣が登城して来るまで、書類などに目を通す。

摂政であるカーライズ公は、ソルニエスの仕事の補佐のため毎日八時には登城している。

それに、ジェイスは同行した。

夏節祭も残りあと一日余り。イリヤ神殿への道には早朝から最後の礼拝をしようと赴く信者が多数、出ている。

その中を、神殿とは逆の方向へと、カーライズ公の馬車は進む。ジェイスは昨夜と同じくシェイラと共に馬車の護衛の騎士と轡を並べ、登城した。

取り敢えず国王に挨拶しようと、兄と共に執務室へ行くと、そこに身支度を調えたクレメントがいた。

「これからはロンドヌスまで徒步になるので、申し訳ないですが衣服をお借りしました」

ロンドヌスの王太子は、昨日着ていた白い長衣ではなく、長期旅行で官吏が身に着ける、鎧代わりの革のベストにカーキ色の木綿のズボン、そしてベージュのローブを纏っている。

腰には、これも昨日までは持つていなかつた長剣を下げていた。全く地味で目立たない服装であるのに、それが逆にクレメントの特異な髪と目の色を際立たせている。

何を纏つても褪せないクレメントの美貌に、ジェイスは欲望を覚えた。

「そつ……、それ、使えるのか？」

場所と状況も構わず頭を擡げた己の中の『狼』に狼狽え、咄嗟に

クレメントを揶揄する。当然ながら、ショイラに思い切り脇を肘で小突かれた。

クレメントは、くすり、と楽しげに笑つた。その顔は、まるで悪戯を仕掛けるフェアリー小妖精のようにも見える。

「一応は。これでも王太子ですから、剣の稽古はしますし」

「ああ、そつ、そうだよな」

胸の鼓動が、どうにも鎮まらない。

13、4の子供でもあるまいに、と自分で呆れつつ、笑いが引き攀るのを直せない。

ジエイスの、クレメントに対する想いに、間違いなく気付いているショイラが、しようがない、というふうに頭を振つた。

「それはそうと」

カーライズ公が、口を挟んだ。

「殿下にはまた急に、ロンダヌスへの」帰国とは……？」

「ええ。考えたのですけれど」

と、クレメントは真面目な面持ちになる。

「賊をこれ以上追い掛け回しても埒があかない気がしまして。これまでに、一箇所の神殿の魔法石がいとも簡単に賊の手に渡りました。残る魔法石で所在のはつきしているものは、ひとつ。

ということは、賊は何がなんでもその石が欲しい筈です。今も奪う機会を待つてランダスに残っているやも知れません。それならばその石を囮にした方が、上手くすれば賊の目論見をも打ち破る事が出来るかもと」

「と、いう事は……？」

眉を寄せた公に、クレメントは頷く。

「ランダスの王の剣を持って、カスタで賊を待ちます

「それはっ！」

カーライズ公が目を剥いた。

「ランダスの王剣は、余程の大事が無い限り、国外へ出す事は適いません！ 第一、囮にとおっしゃるが、それで本当に剣が賊の手

に渡つてしまつたらどうなさるつ。我が国にあれば、大陸一と自負する騎士団が命を賭して守りますつ。その方がどれ程安全かと？？

「僕も」

ソルニエスが、珍しく公の言葉を遮つた。
「クレメント殿下のお考えに賛成です」

1（後書き）

ソルニエス
大胆な王様です。
11歳。

「賊は狡猾にして強大な魔力を持つ魔導師です。イリヤ神殿の魔法石の奪い方といい、このまま探索を続けてもまず、捕まらないと思います。

それに、殿下のお話ですと、問題は賊が魔法石を奪つた事ではなく、カスターの遺跡でそれを使用する事です。ということは、カスター遺跡 자체をどうにかしない限り、魔法石を取り戻してもまた同じ事件が将来起ころうでしょう」

幼い国王の意外な発言に、カーライズ公はすっかり狼狽える。

「しつ、しかし……、陛下、もし賊が魔法石をその……、扱い切れずには破壊してしまうような事態が起きました時は……」

「それも致し方ないかな、と思います」

「へつ、陛下つ！」

「先程も言いましたが、もし魔法石が『怒りの女神』復活のための道具なのだとしたら、それこそ壊さなければ危険です」

「ですが、あれはフィルバード王から代々我が王家に伝わる大切な……」

「そのフィルバード王が、あの石は預かったものだとおっしゃつていらしたと、ランダスの史書には書かれています。僕もそう思います。大体、魔法を使えない我がランダスの代々の王が、あんなに大きな魔法石を後生大事に宝にしている必要は、本当は無いのではないですか？」

随分と斬新な考え方だと、ジェイスは思った。

まだ11歳にしかならないソルニエスが、ここまで考えているとは。

いや、11歳だからこそ、余計な欲に捕われず物事を前向きに捕えられるのかもしれない。

このまま育てば、彼は本当に良い君主になる。

返す言葉を失つたカーライズ公は、眉間に皺を寄せたまま俯いた。

ソルニエスは、全く表情を変えずに、クレメントに向き直つた。

「という訳ですので、ランダス王の大剣は、殿下にお預けします。

如何様に扱われても結構です」

ソルニエスは、脇に控えた侍従に声を掛ける。侍従は一礼し、文机の後ろの飾り棚に置かれた大剣セプティリアを取り上げた。

眼前に差し出された剣を、だがクレメントは取らなかつた。

「では、これはキリアン伯にお預け下さい」

「ジェイスに？」

カーライズ公が顔を上げる。

「何故……？」

「重たいですし」

「……はあ？」

俺は单なる荷物持ちかよ、とジェイスは内心で毒づく。
それが顔に出たらしく、クレメントは軽く笑つた。

「というのは冗談にしても、何と言つてもランダス王の大剣です。
その血に連なる方が所持してカスタまで運んだ方が、剣のためにも
よいでしょう。それに、キリアン伯は剣豪ですから、この剣を使い
こなすことも出来ましよう」

暗に守れと言われて、ジェイスは身が引き締まつた。

と同時に、本当に自分にこの任が務まるのかという、不安も沸き
上がる。

彼は、それを素直に口にした。

「けれど、もし俺……、じゃない、私が賊の手に掛かるような事になれば、ノルオール復活を助ける結果にもなり兼ねません。危険な賭けでは？」

「伯爵は、ご自分が賊に劣るとお考えですか？」

幼い王に逆に切り返され、ジェイスは思わず破顔した。

「いいえ」

ソルニエスも、につこり笑うと頷いた。

「では、セプティリアをキリアン伯に預けます」
従者が差し出す大剣を、ジェイスは受け取った。

「クレメント殿下」

微笑みながら、自分とジェイスのやり取りを見ていたクレメントに、ソルニエスは向き直った。

「これで、王の大剣は大丈夫でしょう。けれど完全に危険を無くするには、賊の目的？？ライズワースの魔法を全く発動出来ないよう、カスターの遺跡を壊す事が必要でしょう。そうでなければ、相手は何度でもこの剣を狙って来るでしょう」

「遺跡を壊すって……。んなでつかいもの、じえない、巨大なものを、どうやって破壊せよと？」

カスターの古代遺跡は、ロンダヌスの国土の3分の1を閉める。ジェイスは、さらりと飛んでもない話をしたソルニエスに、思わず問い質した。

答えは、クレメントから返った。

「それには僕の力が役に立つ筈です。……何せ、僕は魔力だけは馬鹿みたいにありますから」

クレメントは、自嘲とも取れる笑みをちらりと浮かべる。彼の言い様が何となく引っ掛かったが、ジェイスは触れなかつた。一本の大剣を背中に背負い、ジェイスは文机の前へ出たソルニエスに膝を折る。

「王の剣は、このキリアン伯、命に替えても守り抜きます」

「どうか、ご無事で任務を果たされますよう」

立ち上ると、入れ替わりにクレメントがソルニエスに軽く膝を折り、礼を取つた。

「お世話になりました」

「こちらこそ。また是非、我が国へお出で下さい」

ソルニエスは、愛らしい笑顔でクレメントに答えた。

「どうか……、ご無事で」

「己の理解から大きく事態が外れ完全に混乱しているカーライズ公は、弱々しくそれだけをジェイス達の背中へ送った。

「さて、それじゃロンダヌスへ直行か」

玄関広間へ降りて行きながら、ジェイスはひとつ伸びをする。

「でも、王太子殿下、ロンダヌスまで徒歩とは……？」

ジェイスの後についたシェイラが、並んだクレメントに訊ねる。

「ご説明、しませんでしたね」と、クレメントは微笑んだ。

「飛翔の魔法は、何度も使えないんです。あれ、結構魔力を消耗するんですよ」

「え？ って、昨日はけろけろしてたじやないか？」

素直に驚いて、ジェイスはクレメントを振り返った。

クレメントは苦笑して、答えた。

「だつて、倒れていたら探索が出来ないでしょ？」

「じゃあ、昨日はお辛かったんですね？」

眉を曇らせたシェイラに、クレメントは「いいえ」と、美貌に極上の笑みを乗せた。

神々でさえ見蕩れるかと思える笑みに、向けられたシェイラが思わず陶然となる。

勿論、ジェイスは自分の顔色が変わったのに気が付いて、慌てて横を向いた。

「本当に多少です。でも、昨日の今日でまた、といつのばすがに来ると思いまして。それに、キリアン伯もシェイラさんも、魔法での移動は好きではないようですし」

「そ、そりや……、そうだけどさ」

「え、えーと、ロンドヌスまで歩きとなると、今日はこれから街道へ出て、次の街までは夕方には着きますが」

どきまぎから解放されたシェイラが、話題を変える。

だが、クレメントは意外な予定を切り出した。

「いいえ。その前にカスガの館へ行きます」

「カスガの館つて……。何でまた?」

七賢者の一人、カルクトゥース・カスガの館は元の王都フィルバディアにある。カスガが忽然と消えてからは無人で、王とイリヤ神殿の管理下に置かれていた。

「行つて、何がある訳では、多分ありません」

きょとんとするジエイスに、クレメントは続けた。

「ただ、賊の痕跡の多少はあるかも、という程度だと思います」

「それだけ?」

「ええ。それだけです」

きつぱり言つたクレメントの口は、笑つてはいるが確固とした決断を語つている。同時に、真意は全く伝えない謎の輝きを帶びていた。

本当に綺麗な目だなあ、などと、勝手に内心でのろけつつも、ジエイスは頭の隅で冷静にクレメントの性格を分析していく。

もしかしたら、クレメントは他人が苦手なのではなく信用していないのかもしねえ。

そもそも、大国の王太子ならば、それ相応の近中や守役が常に付いている筈である。

それが一人も付いて居ないというのは、どう考へても、クレメントが従者達を煩がつているとしか思えない。

確かに、強大な魔力を有した魔導師である彼が側近らを巻いて城を抜け出すのは簡単だろうが、王太子という己の立場を考慮すれば、無断外出はしないのが得策なのは、馬鹿でも分かる。

明晰なクレメントが、その辺りを分からぬ筈はないのに、勝手な単独行動を取りたがるのは、他人不審としか考えようがない。

しかし、何故他人が信じられないのかと問い合わせたところで、この喰えない王太子は笑顔の煙幕で誤魔化して答えはしないだろう。

「……へいへい」

恐らく、自分も信用されていない一人だろう。
少し物悲しくなり、溜め息混じりに返事をして、ジェイスは玄関

広間へと目を轉じた。

広間は、今日も陳情に訪れる人々で混んでいた。

大半は地方の商人である。彼等は稼ぎ時のこの時期に、何とか中央の商業権を手に入れ、都で商いをしようと目論んでいるのだ。

「年に一度の新年の祭だつてえのに、商売熱心なこつた」

ジェイスは、半ばやけも手伝つて商人根性を皮肉つた。

「けど大変ですね。地方の人々にとつては、この時期しか都に来られる機会は無いでしょうし」

「さすがに、よくご存じで」

暗に風来坊を咎めるジェイスの言い方を、クレメントは軽く受け流す。

「ロンダヌスも同じ様ですから」

大階段の一番下に四人並んだ兵士の間を通り、広間の中央の丸い卓近くまで来た時。

「キリアン伯つ！」

聞いた声に呼び止められて、ジェイスは人混みに目を凝らした。
商人の列を搔き分けてやつて来たのは、昨日イリヤ神殿で出会った二人、パッド・ローエンと二ーナミーナだった。

「どうしたんだ二人共？」

「王太子殿下、私達にも魔法石の奪還を手伝わせて下さい」

「一ナミーナの強い言葉に、ジェイス、シェイラ、クレメントは、顔を見合させる。

「昨日、皆様が帰られた後で一ナミーナと話したんです。このまま盗られつ放しではイリヤ神殿の者として悔しいと

パッドも、真剣な表情で言った。

「私達、騎士団長と神官長にそれぞれ許可は頂きました。殿下と伯爵がお許し頂けるなら……、いいえ、お許し頂けなくともついて行きますっ」

「……おいおい、勝手な事言つなよ」

一筋縄では行かない賊を追うのに、手は多い方がいい。
騎士のパッドは戦力になるだろう。が、一ナミーナはどうか？
確かに、イリヤの神官は皆戦士としての訓練を受けていると聞き及んでいる。しかし、明らかに修行途中の、しかも若い娘がどれ程の戦力になるのかは、全く疑問だ。

治癒魔法を掛ける程度にしか役に立たないのなら、足手まといである。

「相手は並大抵の奴じやねえんだぞ。魔力は強いし。それに他にどんな仲間がいるかつてのはまだ分からねえんだ。付いて来て、歯が立たないから帰りますって訳には行かねえぞ」

「分かっていますっ」

「ほんとかなあ……」ジョイスは、わざと片眉を上げ、疑っている、という表情を作る。

「私たちだって、平素、それなりに訓練をしていますっ」

「一ナミーナが向きになる。

助け舟は、クレメントが出した。

「いいですよ、僕は」

いつものアルカイック・スマイルで、クレメントは一人を交互に見遣つた。

「戦力は多い方がいいですし。それに、二ーナミーナさんは神官戦士でしょう？ イリヤの神官戦士は皆さん武勇に優れ勇猛果敢と聞いています」

知っていたのか、と、ジェイスはクレメントを見る。

クレメントはジェイスの心配を読んで、大丈夫です、と軽く頷く。王太子が許可を出したので、一人はやつたとばかりに手を叩き合つた。

「では、僕達はこれから仲間という事になります」

「えっ？ 私達殿下の従者じゃあ……？」

「今僕は自國に内緒で動いてますんで。身分は大っぴらに出来ないんです。と言つ事で、ただの旅の仲間、として接して頂けたら有り難いです」

「え？ それで宜しいんですか？」

「ええ」と頷くクレメントに、二ーナミーナとパッドは、戸惑いの表情で互いを見合う。

「いいんじゃねえの？ そのほうが、先々気楽だし」

ジェイスは平静を装いつつ、クレメントとより緊密になれるチャンス、と内心でほくそ笑んだ。

シェイラも笑つて頷いたので、後から来た一人は「それなら」と、同意した。

5（後書き）

ジェイス・・・大丈夫か？

「では、改めて自己紹介して頂いてよろしいですか？」

笑顔を深めて、クレメントは自分から始めた。

「僕はクレメント・エディン・ダルタニスです。一応魔導師です。以後はクレメントと呼んで頂いて結構です」

「俺はジェストロッド・キリアン・カーライズ。剣士だ。ジェイスでいい」

「私はシェイラ・ラトランス。傭兵だったけど、今はキリアン伯の従者よ。……って、仲間なら、従者じゃないわね」

付け加えたシェイラに、皆が軽く苦笑する。

二ーナミーナが、改まった顔で続いた。

「私は二ーナミーナ・ワツツ。先程殿下……、じゃない、クレメントが言つたように、神官戦士よ。あと、イリヤ神特有の魔法も幾つか使えるわ」

それを聞いて、クレメントが銀の瞳を大きくした。

「では、『勇者の声』が唱えられますね？」

「何だそれ？」

分からぬ、と眉を顰めたジェイスに、パッドが説明した。

「『勇者の声』は、敵がその呪文を聞くと震え上がり、味方が聞くと勇気が出るという、特殊な呪文です。妖魔の咆哮と近いですね」

「咆哮？？？」

この美人が妖魔のように吠えるのかと想像して、ジェイスは思わずのけ反る。

察したシェイラが、

「そんなことある訳ないでしょ。呪文よ、呪文」と、長身を睨み上げた。

「『勇者の声』は妖魔にも効き目があります。カスターの古代遺跡の中は妖魔だから、それを唱えられる人がいるのは助かりま

す

「じゃあ、カスターの遺跡に行くの？」

「一ノナミーナが、ぱっと顔を輝かせた。

「ええ、最終的には行かなければならぬでしょう」

「うわあつ。私一度は行ってみたかつたんだ。楽しみー」

「一ノナミーナ……。ピクニックじゃないんだよ」

嗜めたパッドが、最後に自己紹介した。

「私はパッド・ローエンです。イリヤ神殿警護の騎士です。よろしくお願ひします」

堅いよ、と囁したジョイスに、シェイラは言に過ぎだと小声を言

い、パッド本人は金色の頭を搔いた。

一通り挨拶をし終わり、一同は出口へと向かった。

門への道を行きながら、一ノナミーナがシェイラに尋ねる。

「これから何処へ？」

「フィルバティアよ。カスガの館に用事があるんですって」

「えー？ 魔法石はもう無いのに？」

「一ノナミーナの尤もな意見に、パッドもジョイスを見る。

ジョイスは溜め息混じりに、

「クレメントが行きたいってんだよ。言い出したら聞かないからな、この」「仁は

「……やっぱ、殿下なんだ」

小さく揶揄した一ノナミーナを、クレメントは「ええ」と恐いにつこり顔で振り返った。

「ま、そういう事ですので、これから出発します」

先頭を切つて歩き出したクレメントの後を、一同は溜め息をひとつ落としてついて行つた。

6 (後書き)

ほんと、ピクニックじゃありませんよー、ニーナミーナ（笑）

銀の水盆の表面に映るジェイス達の姿を、男はじっと見詰めていた。

「……キリアン伯、か」

彼等の姿は、『眼鏡』と呼ばれる魔法を掛けられた夏虫を通して、水に映し出されている。

男が現在居るのは、イリヤ神殿近くの廃墟となつた商人の館。クレメントの予測通り、彼は王の大剣奪取の頃合いを狙つてランダスに留まつていた。

水を揺らせば消える魔法の景色を、男は水盤の縁を叩いて終わらせた。

「さて……、厄介な事になつたな」

昨日からこの館に入り、『眼鏡』を使って城の内部を監視していたのだが、まさか魔法石を『囮』にするとは思わなかつた。しかも、預かつたのはあのジェイス・キリアン伯である。

二十人斬りの騎士。

ジェイスがランダスーの剣豪であるのは、男の耳にも伝わつている。

生半な相手ではない。魔法を使うにしても、用意周到に行わなければこちらが殺られてしまう。

おまけに、ロンダヌスの王太子にして強大な魔力を持つクレメントまでが、同行している。

「大剣を、無理にでも急いで奪うべきか、否か……」

思案の目を、廃墟の破れた硝子窓へと移す。

その時、不意に目の前に少女の姿が現れた。

「……アーカイエス様」

黒髪に黒い瞳の幽鬼のような少女は、憐れな声で男を呼んだ。男

？？アーカイエスは赤い目を僅かに細める。

「ララか

「はい」

少女は、やはり弱々しい声で答えた。

「昨日のウォーム神殿での魔法、よく出来た。」苦労だったね

ララは、実はロンダヌスに居る。昨日ウォーム神殿で、ジエイス達を犯人に仕立てようと神聖魔法を唱えたのは、彼女だった。

アークエスは、ララと遠距離でも会話出来るよう、自分の血を固めて作ったペンドントを彼女に持たせている。

ララがそれに向かつて話せば、アークエスの眼前にぼんやりとだが少女が現れる。

ぼうっと震むララは、心配そうな表情でアークエスを見詰めた。

「……本当に、あれで良かったのでしょうか？」

「何の、話だ？」

「七賢者のお一人、アルクスク大神官の魔法石を持ち出すなどと……。やはりしてはいけないことなのでは……」

「ララ」

アークエスは、殊更優しい声で言った。

「ファー・レン神殿に帰りたければそうしなさい。神官長には私から手紙を書いておく

「いいえつ

だが、ララは強い声で否定した。

「申し訳ありません、アークエス様。もう申しません。ですから……っ

「分かつていてる

アークエスは薄く笑んだ。

「ところで、今何処にいるのかな？」

「ローネスの南区の宿屋におります。……私、これからどうすれば

？」

「そうだね、もう少しでこちらの用が終わる。ローネスに行くのは後四、五日かかるから、それまでそこ宿屋にいなさい。宿の名前

は？」

「川蝉亭です」

「分かつた」

ララは深く頭を下げるが、現れた時と同様唐突に消えた。
少女の残影を惜しむように、アーカイエスは暫し彼女の居た虚空
に目線を留める。

「済まないな」

溜め息をひとつ落とし、脚の高い椅子から降りる。

「……あちらの思惑に乗つてやるか」

小さく呟くと、アーカイエスはゆっくりと部屋を出口へと横切っ
た。

7（後書き）

魔法石の盗人にして、ノルン・アルフルの魔導師、アーカイエス。

やつと名前が出てきました・・・（汗）

ヴィードからフィルバデイアまでは馬で小一時間である。王都の南門から真つすぐ南へ、五人は馬を進める。

陽が高くなり始め、朝は少し冷えていた風が蒸し暑さを含み始める。

街道を行く荷運びの男達が、首に掛けた布で汗拭いている。やがて、なだらかな林の丘を降りた辺りに街の跡らしき風景が見えて来た。

「ここが、フィルバデイアですか……」

更に近付き、廃墟に焼け焦げた跡があるのを、クレメントは複雑な表情で見詰めた。

一百年前。

当時まだ少年であつたティルス・アーバイン王は、炎の魔女ファーレン・レイムの凄まじい魔法の炎によつて焼け落ちる城から、従者一人と共に逃げ延びた。

ファーレンの炎はフィルバデイア城のみならず、王都の半分を舐め尽くしたという。

火に焼かれ、あるいは攻め寄せたアストラנס兵に殺された人々の遺体は、累々と中央広場を埋めた。

生き残つた人々は、家族親族の遺体を収容する暇も無く、ヴィードへと逃げ出した。

数日後、焼かれた街は、今度は国土を奪還するべく戻つた王を助けたケイト・クリスグロフの水の魔法で、大量の水攻めに遭う。

駐屯していたアストラヌス兵の大半が流され、市の外れに集められた市民の遺体は、水の勢いに千切れ、あちこちに散乱したといふ。

火と水。二つの強力な魔法によつて荒らされた街は、もはや人が住めるまでに回復するには膨大な資金と時間が必要な有り様になつ

てしまった。

そのために、ティルス王は王都を捨てたのだ。

クレメントは、フィルバーディアの廃墟を進みながら、改めて魔力の功罪を強く感じた。

ファーレンの魔法は無論罪だが、国を奪還するために必要だつたケイトの魔法も、果たして本当に適切だつたのだろうか……？ここには、新年を祝う賑わいも、人の息遣いさえ感じられない。夏草が、壊れた土塀の側から生え風に揺れるのを見遣り、ロンダヌスの王太子は深く溜め息をついた。

「どうした？」

やや後ろに付いていたジェイスが、彼の溜め息に気が付いて声を掛けた。

「何か、気が重そうだな」

「いえ……」

クレメントは、薄く笑つて首を振った。

「フィルバーディアは、元の名をティリア・ミラと言つたそうですね」「ああ。何でも古代語で『王の冠』って意味だつてな

「そうです。それ程美しい都だったのでしきう……」

今は見る影も無いが。

クレメントが言わなかつた言葉を、二二ナミーナが言つた。

「今は惨澹たるものね。当時の人達の苦悩が伝わる気がするわ」王都としての役割を捨て一百年。

ほぼ灰燼と化した街は、それでもここ四、五十年で周辺から人々が集まり、僅かだが街の一部に住み着いている。

北門から廢墟の中を歩いて来た彼等は、そんな人々が建てた新しい家並みの前を通る。

粗末な家々の前に、それでもイリヤの旗が立てられているのに、クレメントは少しほつとした。

そこから程なくして、カスガの館へ着いた。

館は、思つていたよりもこじんまりとした建物だった。菲尔バデイアの焼けた煉瓦を再利用したらしい壁は、色もまちまちで、所々欠けて落ちている。

窓の数から察して部屋数は僅かに四部屋、かの有名な七賢者の館とは思えないくらい小さい。

一行は馬を降り、館の前の馬繫ぎに手綱を結わえた。

正面玄関には兵士が二人と騎士が一人、警備に当たつている。ジエイスとシェイラが騎士に近付いた。

「中を入れて貰えるか？」

騎士はジエイスの顔を見て、相手が誰だかすぐに分かつたようである。快く承諾した。

館は、玄関ホールなどはなく、扉を開けるとすぐに書斎だった。壁一面が書棚となつていて、ぎつしりと魔道書やその他の書物や巻いた羊皮紙で埋まっている。

入り口の正面の書棚の前に大きな文机があり、その上にも書物が幾つか乗っていたのだろうが、今は床に転がっていた。

床に散乱していたのは、書物だけではなかつた。

様々な書類、筆記用具、引き出し、置物などまでが、壊れたり転がつたりしている。

「こりや凄いな」

足の踏み場も無い程に荒れた部屋に、全員が驚いた。が、一番驚いたのは警備の騎士だった。

「これは一体……？」

「恐らく盗人でも入つたんだろうぞ」

ジエイスの言葉に、パッドと同じくらゐの年頃の騎士は首を振つた。

「そんな事はありません。我々が毎日毎晩、周囲の警護に当たっておりますから。賊が忍び込む物音や人影などが見えたら、絶対に見逃したりはしませんっ！」

「では、魔法で忍び込んだのでしょうか？」

クレメントは、部屋の周囲をゆっくり見回した。案の定、リトの魔法陣に残っていたものと同じ魔力の気配が、僅かに残っている。

「この館には魔法防御が一切掛かっていませんから、魔力のある魔導師なら簡単にれます。そして、僕達が追っている人物も、強大な魔力を持っているであろう、魔導師です」

「そんな魔導師が……、どうしてこの館に？」

「探し物は、魔法石よ」

二一ナミーナが腰に手を当てる。

「でも、これだけ探し回つても、ここには無かつたって訳ね」

「しかし、手掛けりは見付けたようですね。……そこに」

クレメントは、文机の隣の、机と同じ高さのチェストの側へ寄つた。

チェストの上には、水の入った銀の水盆が置かれ、その中に大人の拳大の大きさの水晶球が入っている。

クレメントは水盤の上に手を翳した。と、白い光が、水晶球から発する。

光の一筋が立ち上がり、横に広がると、灰色のローブを着た中年の魔導師の姿になつた。

水晶に閉じ込められていたカスガの影は、にやりと痩せた顔を歪ませる。

「この水晶の魔法書を見る事が出来たあんたは、恐らく相当の魔力を持つてゐるだろう。そこで、あんたに頼みがある。イリヤ神殿にある私の魔法石『颶』を、カスターの遺跡へ持つて行つて欲しい。あれは、持ち出すべきではなかつた。何のために作られたのかもよくわからないのに、我等は無謀にもあの石を碎いてしまつた。そのため無用の戦いも起きた。

私の石ひとつ返したところでどうにもなるものではないが、どうか、出来れば願いを聞いてくれ。石は、神官長の執務室の隣にあるらしい。

カスタ遺跡で魔法石が置かれていたのは、遺跡中心から東に少し寄つた、地下通路に面した一部屋だ。どうか、頼む。

……私は、これからファー・レンに会いに行く。さらばだ

ふつと、カスガの影が消えた。

「これを、賊も見たって事か……」

ジェイスの呟きに、クレメントが「そうですね」と頷く。

「どうして見終わつたあと壊さなかつたかは謎ですが。でもこれで、僕も知りたかつた情報が聞けました」

「情報つて？」

「魔法石が、元々カスタの遺跡のどの辺りにあつたか、です。地下通路、という事は、ライズワースは地下に呪文発動の迷宮を造つたという事になります」

「ライズワースの地下迷宮つて、何？」

初耳な話に、顔の真ん中に大きなハテナをくつづけているニーナミーナに、ショイラは片目を瞑つた。

「後で教えてあげる」

9（後書き）

ライズワースの地下迷宮。

核心は、まだまだ先です（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8353v/>

地下迷宮の女神

2011年10月9日03時25分発行